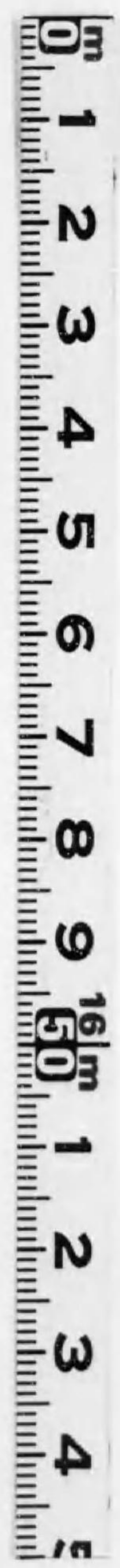


505

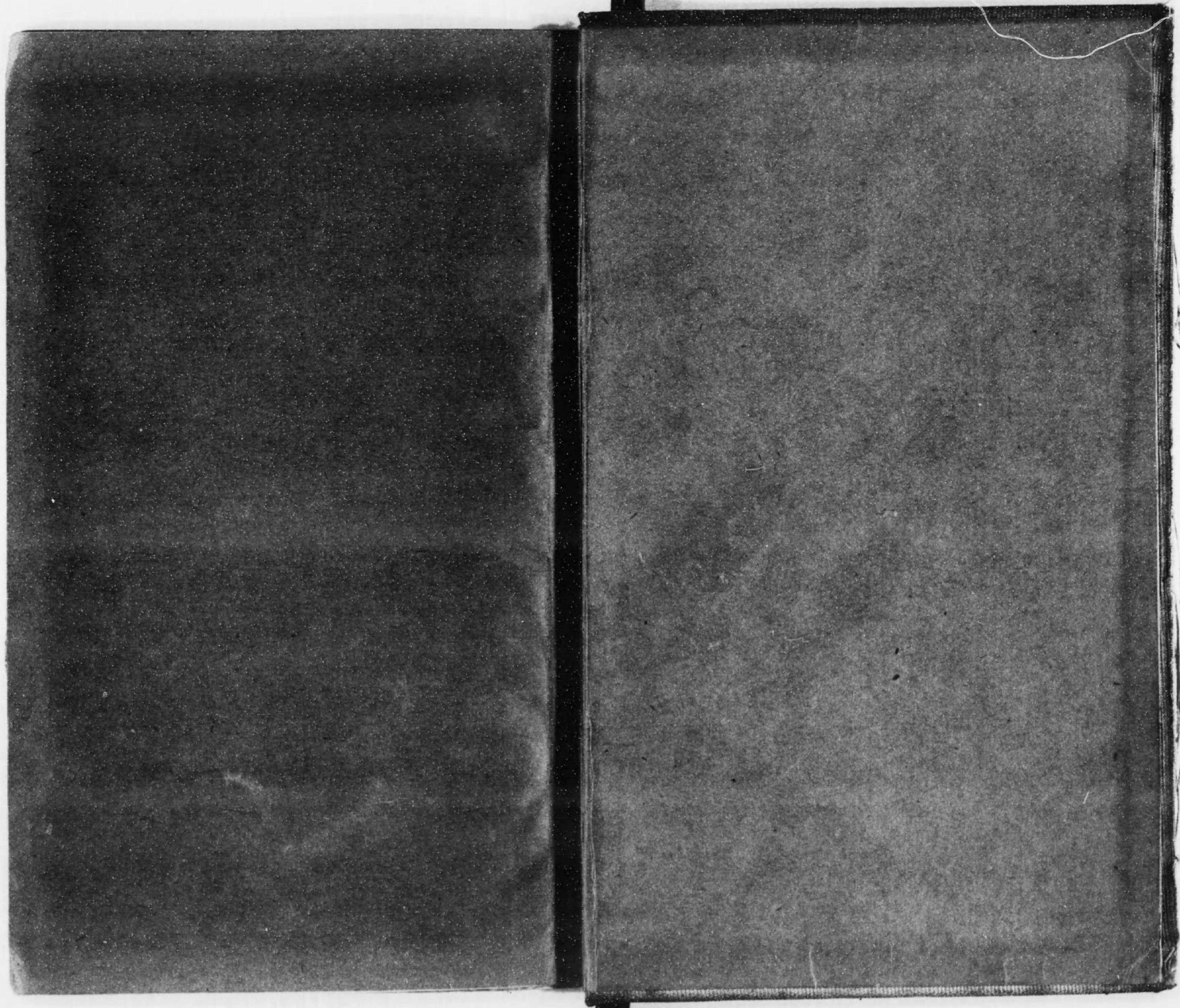
61



始





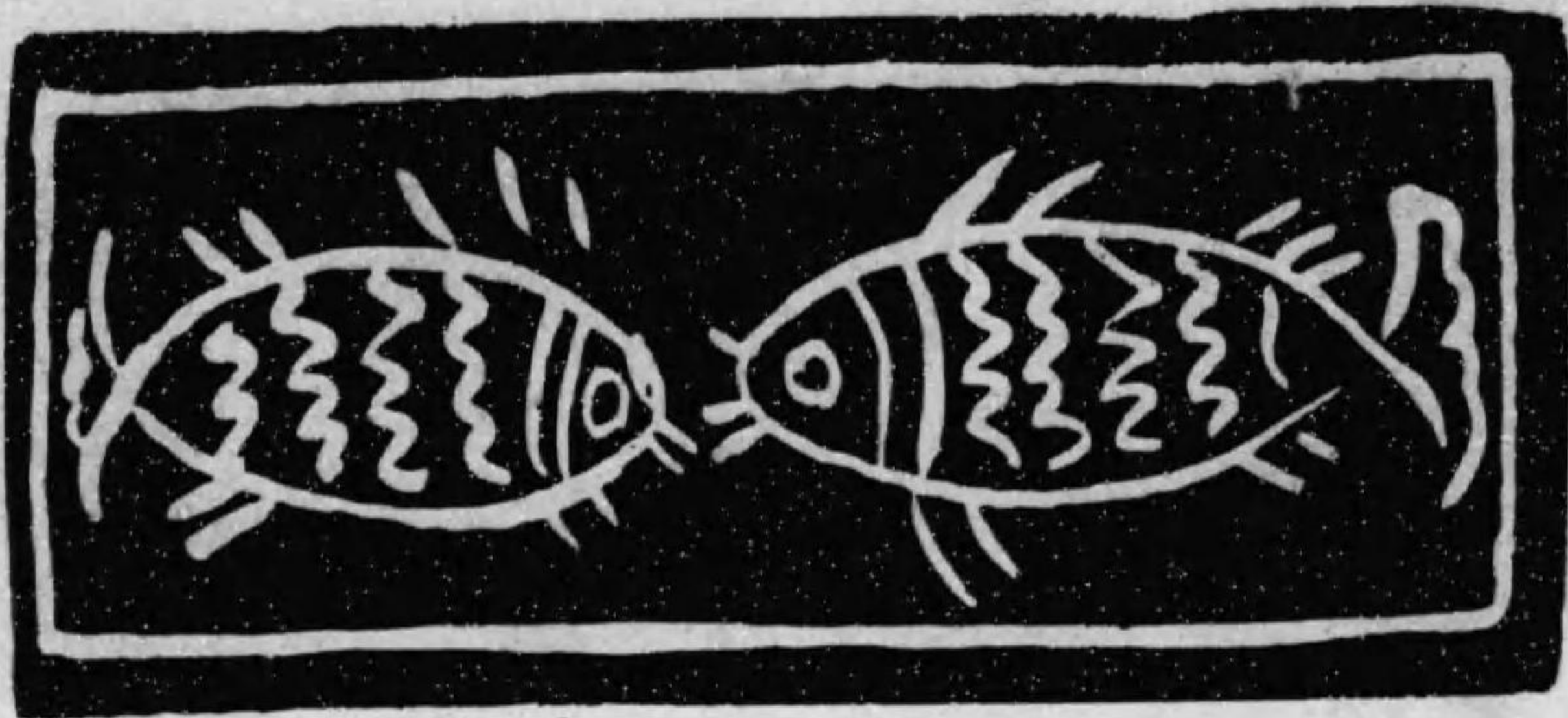






久  
野  
氏  
印





川村花菱著  
山村耕花菱作



505-61



脚本集

第一卷





## 序

私は、上演と云ふ事を考へずに脚本を書いた事は、これまでに一度もない。此の中の「女一人」は、明治四十四年一月東京俳優學校の試演に上場する爲に書いた、私に取つては處女作とも云ふべきもので、「枝川の流れ」は、大正四年九月新日本劇を創めた時、その第一回興行に上場したもので、共に原稿からすぐに舞臺に上つたものである。

その他の諸篇いづれも、上演を目的としたものではあるが、ともかく讀みものとして發表したもので、「死」は「六號の散彈」の名で、ある雜誌に送つたなり、そのまゝになつて居たのを昨年十月再び書きなほしたものである。

長い間演劇の實際方面にのみ働いて居た私は、今日まで、自作を脚本集の形で發表する機会もなかつたが、此度畏友久米正雄兄の御盡力で、その一部を公にする事が出来たのは、私に取つて此の上よろこばしい事はない。

終りに望んで、此の貧しい内容を飾る爲に装幀の勞をとられた山村耕花兄に深く感謝する次第である。

大正十二年三月三日夜

花菱生



目次

✓松	.....	三
✓櫻 咲く頃	..... (大正八年十月作)	三
✓夕 顔の花	..... (大正三年八月作)	四
✓流 れの女	..... (大正四年八月作)	六
✓中 元の夜	..... (大正元年七月作)	一〇
✓女 一人	..... (大正四年五月作)	一七
✓女 一人	..... (明治四十四年一月作)	二四
✓熊 と人 と	..... (大正元年八月作)	二六
✓死	..... (明治四十五年三月作)	二八
✓枝川の流	..... (大正四年九月作)	三〇





二幕四場

元祿十一年頃の事



## 第一場

## 石山の春

舞臺の上手に小さい流れがあつて、それに風雅な橋がかまつて居る。橋の下手は、ずつと一面の平地になつて、そこ此所に、今を盛りの櫻の木數本あり。櫻に交る松の木立の間を越して、正面に遠く湖水を見晴らす。舞臺よき所、花の下に美しき毛氈を敷きつめ、その上に酒盛の道具いろくんと置きなれば、花見の座が設けてある。

幕あく。

と、花見の町の者三人、や、遅れて来た女連れをむかひに行つて来たと言ふ風で、三四人の女の先に立つて登場。

男甲 さあ、早ふ御坐れ！ なんほ女子の足がのろいと云ふて、さい前から、どれ程まつたか知れん。今まで何をして居たのぢや？

男乙 ほんまに、朝早ふにから来て、石山一番の見晴らしのよい所に陣取つて、待てどくらせど姿が見えんので、迎ひに出やうかと思ふても、わしがのいたら、場所を取られて仕舞ふと思ふて、じつと待つて居る中に、腹はへる、氣はくさくする、私はもう、腹が立つてならなんだ。さあ、早ふ来て、酒もりしよう。

女一 ほんに、きつう待たしてすみませなんだ！ その代りには、これから何なりとして上げる程に、みなさん、きけんなほして下さんせ。

男丙 何のく！ 楽しみに来た今日の花見、なんできけんをわるうしてよいものか、さあ、又人に場所を取られてもつまらぬ事、早ふ行つて、遊びませふ。

と、さどめき合ふて、上手より下手の奥に去る。しばらくして、女形霧浪千壽、三笠成右衛門と打ちつれて登場。

成右衛門 千壽どの、今日は、怎した事か、何となう、さへくせず、眼の中も、いかううるんで見えるが、何ぞ、氣にすまぬ事でも御坐りますか？ 今日はいままでにない大入りだつた前狂言の當り祝ひに、座元藤十郎どのはじめ、一座のものがよろこんで居る中に、こなた一人が沈んで居ては、わしも怎やら氣が減入つて仕舞ひ相ぢや。永い間のきづまりな芝居もすんで、



心置きない今日の花見、晴々として下さらぬか。毎日のやうにいやぢや〜と云ふて居た、袖崎源次とつきあふ事も、もう今日からは入らぬ事ぢや……

千壽 芝居の間は、氣が張りつめて居た故か、これ程にも思はなんだが、いやな思ひも、もうせんでもよいと思ふと、急にいろ〜の事が思ひ出されて、なさけない氣になりました……

成右衛門 同じ芝居の中に居て、誰れにも勝たう、己れ一人をよう見せやうと思ふ程あさましい事はない。さりながら、いかに源次が、もがいたとて、千壽殿は人の許した万太夫座の立女形、案じる事は御坐りませぬぞ！

千壽 藝の力で負ける事は、諦めもつく事なれど、役の性根もうち忘れて、争ふ人の相手になる程、苦しい事は御坐りませぬ。それを思へば藤十郎どのとする芝居は、親船にのつたやうに、心も身もまかせて居て、自然と芝居がして居られる。同じ役者と生れたら、座元のやうになり度いものぢや。

成右衛門 ほんにのう。藤十郎は、眞らしき名人ぢや、三右衛門は、うそらしく而も名人ぢやと山下京右衛門殿が云はれたが、私は、三右衛門のやうな、わざとらしい役者には、頼まれてもなりたうない。可笑しき事が、實事ぢや、それは常にある事をする故で、身ぶりは心のあやな

れば、喜びも悲しみも、心さへ極まつて居たら自と形にあらはれる、身ぶり丈で見せうとするは、愚かな事ぢやと云はれた事が、私は、藝の生命と思はれてなりませぬ……

千壽 わしもこれまで、いろ〜の立役にもつき合ふたが、藤十郎殿程、女形の心を知りぬいた人はない。稽古の折りは、三度々々のものまでも、女子の口に會ふやうにと、いろ〜に心を碎かれ、いつぞやも、浪花の芝居に居る時に、化粧の水にと加茂川の水を送られました。そのやうにいたはられたら、何ほ心のまがつたものでも、舞臺に情の出ぬ事はない筈で御坐りませぬ。ほんに、藤十郎どののは、役者の中の役者と云ふもの、よい立役につき合ふのが、女形に取つては、此の上ない幸福と云ふものぢや。

と、二人、お互に藤十郎の事を考へて、うつとりして居る所へ、女形袖崎源次、岩井左源太、尾上左近等うちつれて登場。

源次と、千壽とは、互に顔見合はせ、源次は、にくさげに千壽を見る。

しばらくして、二組は、互に反對の方に退場。

やゝあつて、上手、橋の方から、阪田藤十郎、靜かに登場。じつと橋の上から水の流れを見て居る。と、太夫元都萬太夫靜かに登場して、ぼんと藤十郎の肩を打つ。



萬太夫 藤十郎どの、さいぜんから、何をして居られましたか？

藤十郎 水の流れを眺めて居ました！

萬太夫 水の流れを………(と附に落ちないやうに)何の爲に？

藤十郎 何の爲とては御坐りませぬ。只、流れる水を眺めて居た丈で御坐ります。

萬太夫 ほ、う？ 水の流れを眺める事が、何ぞ、面白う御坐りまするかな。それとも何ぞ、狂言のたしになるとでも申すので御坐りますか。

藤十郎 されば………

と、當惑顔にあたりを見て居る所へ、作者近松門左衛門、鼓の師匠ホ、屋庄右衛門登場。

藤十郎 何と申してよろしいか………只、水の流れが、川下へ川下へと休む間もなく流れ去るのを、尊い事と思ふたまで、御坐ります。芝居は、常が稽古であるべきものを、うはの空の心にて、なまけ勝ちな我々が、耻かしくなつたので御坐ります………

近松 ある時、孔子が、河のほとりに立たれ、逝くものは斯くの如きか、晝夜を舍かずと云はれたと聞きました！ 水の流れ、草木のさま、咲いては散り、散りては咲く、櫻の花の風情にも、計り知られぬ尊いものが御坐りますな！

藤十郎 (じつと近松の言葉にきゝほれ)此の身は、取るに足らざるものなれども、只今の御言葉で、藤十郎、それに似た思ひが、心の中に湧きます。藤十郎、まだく、苦勞が足りませぬ、たとへ木の葉の一ひらでも、役者に取つて、爲にならぬものとは御坐りませぬ………(深い思ひ入れ)うん！ 逝くものは斯くの如きかな、晝夜を舍かず………

萬太夫 (よき程を見はからひて)さあ、最前からこれに用意が出来て居ります。何卒席にお着き下され。

と花見の席に、招じる。

以前の、千壽、成右衛門、源次、左源太、左近等登場。いづれも、藤十郎を上座に推す。藤十郎、近松と庄右衛門を上座に招いて、次に、萬太夫、次に自分と云ふ順に、他は、上下に分れて座る。

芝居のもの二三人若き美しき年少の俳優二三人、美しき着つけにて、出で來り、靜かに一同の間に酒を注ぐ。

萬太夫 前狂言の大入りの祝ひのしるし、いさゝかの志で御坐ります、何卒、御心置きなく御す  
ごし下さるやう、私から御願ひ致します………

と挨拶する。



藤十郎　これは、御手あつき御もてなし、藤十郎、一同に代つて厚く御禮を申上げます。が、前狂言大入りの事については、藤十郎いさ、か申し度い儀が御坐ります。阪田藤十郎、役者となつて身を立て、やうく三十四歳の折「夕霧」の狂言にて、藤屋伊左衛門をつとめ、初めて藤十郎と云ふものありと、知られて此の方、都万太夫座の座元として、年々いろくんの芝居狂言致せしが、此度程の大當りは、全く前後を通じて、只の一度も御坐りませぬ。これ、素より、一座の人々、上は作者、役者一同、下は走り使ひに至るまで、一同の御骨折には相違御坐るまいが、一ツに、その源は、近松殿の御作の力と信じます。〔間〕そのはじめの「夕霧」と、此度の「夕霧阿波の鳴戸」とは、實に、雲泥の相違とも申しませうか、藤十郎、しみく狂言の力の程を覺りました。今更のやうにて、誠に御耻かしう御坐ります。此の心の喜びの盃、何卒、御受けの程を願ひ度いと存じます。〔と近松に盃をさし〕藤十郎、ある時、此度の狂言は、藤十郎の役少なしとの非難を聞き、芝居は、役者を見せるものではなく、狂言を見せるものにて、役者の心得としては譽められんと思は、見物を忘れ、狂言はまことのやうに満足にしたるがよしと申した事が御坐りますが、此度の狂言にて、近松殿なくば、たとへ十人二十人の藤十郎あるとも怎する事も出来ぬ事をまのあたり見たので御坐ります。若し貧うして、金銀ほし

き時、金銀は盗みでもあるべく、又途中に落ちてある事も御坐りませう。されど、狂言ばかりは、盗まんと思ふても根から無きものと、つくく覺りました。今にしてこれを覺つた藤十郎は、何たる文盲な役者で御坐りませう。まことに役者と申すものは、己れを見せんと思ふ心を戒め、一座心一つにして、狂言を見せる事に心がけなければなりません。己れを見せる事をやめ、狂言の中にかくれる事が、役者の本分にて、そして猶、身をかたく、行ひを穢さず、人の太鼓持つやうな事せぬやう心がけねばなりません……〔と、云ひつゞけて、ふと氣をかへ〕ハ、又いつものへほ談議、さあ、くつろいで、御すごしなされ！……千壽どの

と、藤十郎、千壽に盃をさす。千壽のんで、藤十郎に返盃しやふとするを  
藤十郎　その盃、源次どのにさ、れよ！

千壽鳥渡考へて、源次にさす。源次、快く受取らぬ。

藤十郎　源次どの、何故受けぬ！〔とじつと思ひ入れ〕私は、そなたに、前狂言の間から、云ひ度い事があつたのだが、利發な人故いつかは氣づく事もあらうと、そればかりを待つて居たが、やはり云はねばならぬ日が来た。皆も聞かれよ！此度の狂言、源次の仕方心得がたし。千壽は主、源次は家來の役なるに、主従の分ちの見えぬは何故であつた？さ、それは、源次、根



心に、千壽は立女形、吾は二三番下なれば、藝になつたら勝たうものと、樂屋の心舞臺に出て、それが見苦しいものであつた。まこと千壽「打ち勝たんと思ふなら、家來らしうしてこそその事、家來が主に勝たんと思は、自らその役にもならず、もし又そのやうの家來あらば、暇出よすり他致し方もないものぢや！」（と快く笑ふて）源次どの、心のくもりを、拭ひ去つて、快く、千壽どの、盃うけ、幾久しう、手を握り合ふて藝道をはげまれよ！

源次、無言のまゝに、首を垂れて、涙をこぼす。

藤十郎 深い縁のあればこそ、一座の人となつたるもの、千壽どの、心持よくつき合ふて下され！

千壽 源次、うれし想に盃を取りかはし、一座の氣分、急にはれやかになる。

所へ、芝居のもの一名、手に草履を持つて登場。

芝居のもの 御遊興中、失禮とは存じましたが、座元が、次狂言に御使ひなさる御草履は、これでよろしう御坐りますか、心にかゝりました故、御伺ひにまゐりました。

と草履を見せる。

藤十郎（草履を見て）これは、あまりに大きう出来すぎたの、もつとく小さくして下さい。

芝居のもの されば、恐れ入りますが、一度御召し下さいませ。實は、内所にて、おみ足の寸法

をはかり、その通り、きちんと合ふやうに致しましたので御坐りますが……

藤十郎 さればく、これを、私の常の履料としたら申分あるまいが、舞臺で使ふものとしては、もつとく小さくなければならぬのぢや（と相手の顔を見て、分らなければ、説明してやらふと云ふ風に）よいか、此の次の私の役も、傾城買ひの狂言故、もし此の草履、揚屋の庭にぬぎすてなば、藤十郎は、キツイ蹴足ちやと、見物方に笑はれ、自然と狂言が出来なくなる。よし、指にはさんで、出やうとも、ぬいだ時が芝居なれば、その心持で作つてくりやれ、よいか、よいか？

芝居のもの、「畏りました！」と云ひながら立ちかへる。

藤十郎 待て！ 知らぬ間に、わしの足の寸法を覺えたは、全くそちのはたらきぢや、小さい草履を註文するは、藤十郎のはたらきぢや！ 決して悪う思ふでないぞ！ よい事をしてくれたのだ、忠義な事をしてくれたのだぞ！

と、傍のものに命じて、金一封を芝居のものに渡させる。

芝居のもの、感謝して立ち去る。

と、此の時、下手奥にて、さわがしき人聲。つゞいて、以前の花見の男女急ぎ登場。その中の一人の男が、何か怒つて云つて居るのを、皆で押ししづめて居る。



男甲 何ほ、何でも、理不盡ぢや！ 私は、朝から、あすこの場所を取つて居たのだ………それを、追ひ拂ふとは何事だ！

男乙 まあ、静かに、相手は、侍ぢや、相手は侍ぢや！

男甲 何ほ、武士でも、あんまりだ！ 人が、よろこんで花を眺めて居る場所に來て、此所はよい眺めぢや、殿の御座所を設けるから、立ちのけとは何事だ！

男丙 まあ、静かにしたがよい！ 相手は武士ぢや、それに、おまへは大變に酔ふて居る！ なア、泣く子と地頭と云ふ事だ、早ふいなう、早ふいなう！ 花は何處でも見られるがな！

と一同なだめながら、下手へ退場。

藤十郎、此のはなしを聞きながら、その不法を許す事が出来ないと云ふやうな心持で、じつと、眼を上げる。その眼が、ふと近松門左衛門と出合ふ。

折からの風に、櫻の花がちりかゝる。

——静かに次の場に移る——

## 第二場

### 武士の花見

舞臺は、前場と同じく石山の一部。上手下手に、櫻と櫻との間に幕を張り、上手の方に主人の座を設け、それにつゞいて、一門の人々整然と居並んで花見の宴を張つて居る。舞臺の真中よりやゝ上手に、形よき松の大木ありて、その幹に幕の紐をくゞりある。日さむるばかり美しく咲き亂れたる櫻の花。その奥、前場よりは一層ひろく、一層あからさまに湖の様見え、一見、石山中最もながめよき場所と感ぜられるやうな舞臺装置。

主人 (湖をながめながら) まことに、此所はよい眺めぢや。いづれも同じ花ながら、恁して見ると又格別の美しさがあるな。

家來甲 御意の通りに御坐ります。皆、石山にまゐりますものは、いづれも此の場所を獲やふと致します。此所は、此の山中で、一番美しい所で御坐りますので、町人などは、夜の明けぬ中から、番をして居るものさへ御坐ります。



主人 ハ、誰れの心も同じ事ぢやな、然し、よう此の場所が手に入つたな。

家来乙 されば、今朝程より、町人共が酒盛りをして居りましたのを、只今追ひちらしましたので御坐ります。初めの程は、とやかくと申しましたが、殿の御坐所になるのだと申しますと、蜘蛛の子のやうに散つてしまひました。

家来丙 それと申すも、皆殿の御威勢で御坐います。一同恐悦に存じ上げます。

と、一同が、主人の氣持のいゝやふな事を云ふ。主人は、いゝ心持になつて、酒をのんで居る。

家来甲 御威勢と申せば、あれ程の藤十郎さへ、此のすぐ下に花見の宴を張つて居ります。京に又なきあの藤十郎も、殿の御威勢には及びもつけぬので御坐ります。

主人 何、阪田藤十郎が居るとか？

家来甲 御意に御坐ります。

主人 そうか、それは、よい機だ、然らば、藤十郎に盃を取らさふかの、そして、此所で、舞を舞はして見せふ……風く呼べ……(家来が、妙に躊躇するのを見て) 風く呼ばぬか。

家来乙 されば、他の藝人と事變り、かつて人の招きに應じたる事すらないと申す事で御坐りますれば……

主人 そのやうな心配無用ぢや！ 余が云ふたと申せ！ 高木主膳が云ふたと申せ！ さあ、風

く呼べ！

家来乙 ハッ。

と、挨拶して、幕の外に出て行く。主人は、いさゝか不安だと云ふ心持から、しきりに酒をあほつて居る。

家来甲 イヤ、たとへ、天下の阪田藤十郎とて、殿の御言葉をそむく事は出来ませう、やがて、これへまゐるで御坐りませう。

家来丙 誰れの前にも出た事のないと云ふ藤十郎が、これへまゐつて、御前に舞を舞ひましたら、その事が又評判になつて、殿の御威勢は四海にとゞろく事で御坐りませう。

家来甲 いづれにしても、萬太夫座の舞臺の外で、藤十郎の舞を見るのは、子々孫々までの名譽と申すもので御坐ります！

家来は、安心しきつたやふに氣をつける。が、ふと沈黙が續くと何となく不安な氣がみなぎつて来る。

と家来乙がかへつて来る。



主人は、乙を見るなり

主人 藤十郎は、まゐると申すか？

とあはたしく訊く。

家来乙 まゐりませぬ！

主人 何、来ぬ？ 何故まゐらぬ？

家来乙 折角の御意ながら、藤十郎は舞臺以外に、いづ方への御招きにも、まゐらぬ想に御坐りまする。

主人 余が、招ぐと申してもか……？

家来乙 はッ、丁重なる言葉の中に、ほと／＼當惑の色をあらはしまして、只すら御辭退申すとの事で御坐りました。

主人 よし！ (と何か決する所あるらしく) 然らば、斯やう申せ！ 花見の宴に、隣り合はせた縁に由つて、盃を取らせ度い、手間を取らせぬと申して来い！

家来乙 ハッ。

と再び、幕の外に出て行く。

家来甲 藝人の分際として、殿の御言葉にそむくなどは、無禮至極なもので御坐りまする。

家来丙 場合に由つては、芝居興行差止めるも、一つに殿の御所存にある事を心得ぬものと見えまするナ。

主人 よい／＼、余は、藤十郎に、舞はして見せるぞ！

主人、又酒をのんで居る所へ、家来乙登場。

家来乙 阪田藤十郎、只今、これへまゐりまする……

主人 来るか……

一同がはりつめた気分になつて待つて居る所へ、藤十郎先に、ホネ屋庄右衛門、その他、美しき役者二三名つき添ひて登場。丁寧に、挨拶する。

主人 藤十郎か……余は、高木主膳ぢや！ ようまゐつたな！ そちの名は、とくより余の耳にも聞こえて居る。適れ天が下の役者、古今まれなるもの、由はよう知つて居る。かゝる席にて、禮をつくさぬうらみはあるが、余が盃を取らせ度い、どうぞ、心よく受けてくれ！

家来共、藤十郎の前に盃を持ちこび、

家来甲 河原者をも、ひとしなみに思召す殿の御心の廣さを思ひ、有難く頂戴致したらよからふ。



家來丙 同席。許さるゝさへ勿體ない儀を、御盃まで下し置かるゝのぢや……

と盃をさす。藤十郎、だまつて見て居る。

主人 ハハハハ、花見の席ぢや、かた苦しい事は無用に致せ！ 藤十郎、あらためて差す！ さあ、受けてくれ！

と、主人自ら差す。

藤十郎盃を受けて、主人に返へす。

主人 (盃を受けて、藤十郎、余は、そちの、名聲丈はよう知つて居るが、そちの舞臺を見た事が無い、一度余に見せてもらぬか？)

藤十郎 有難き仕合はせに御坐りまする。殿様の如き御方に、御批判をあほぎまするは、藤十郎に取りまして、無上の光榮に御坐りますれば、何卒、萬太夫座へ御こし下さりませ！

主人 余に芝居に來いと申すのか。

藤十郎 左様、藤十郎は、萬太夫座に芝居興行仕り、僅かの御寶にて、どなた様にも御覽を願ふて居りますもので御坐ります！

主人 藤十郎、そちには、余の心が、分らぬのか……

藤十郎 ……

家來甲 然らば、そちは、あくまでも殿に下司町人と肩を並べ、御同席を願ふと申すのか？ ……

殿の前では、舞へぬと申すのか？

藤十郎 これは又、御言葉とも存じませぬ、されば、もし、萬太夫座の御見物が、己れは、武士と同席はイヤぢやと申されたら、いかなもので御坐りませぬ？ 藤十郎に取りましては、只々藤十郎を見て下さる方を、大切なる味方と心得て居りまする。されば藤十郎の藝を愛して下さる方に、金持も貧乏人も御坐りませぬ。まして、武士も町人も御坐りませぬ！

家來甲 然らば聞くが、もし、萬太夫座を買ひ切つて、殿一人御見物遊ばしたら、そちは怎すると申すのぢや。

藤十郎 芝居は、見物の前にて致すもの、見物とは、只御一人の事では御坐りませぬ！ 従つて、芝居には芝居の作法あり、御見物には御見物の作法もある事、その儀はいかゝかと存じまする。たとへ、僅かの金銀にて、役者渡世を致せばとて、只々黄金の前にのみ芝居致すものでは御坐りませぬ。藤十郎は只舞臺で舞ひ、御見物は、只その前に集まられて、價ある丈の金銀を拂はれます……



主人 もうよい／＼！ 藤十郎、そちが望むがまゝの黄金を取らず、余の前にて舞ふてくれ！

藤十郎 その儀ばかりは御ゆるし下され！

主人 價は取らずと申してもか？

藤十郎 藤十郎は、たとへ御大身の御方の前とは申せ、黄金の爲に藝を賣つては、萬太夫座の芝居見物に申譯が相立ちませぬ！

家<sup>※</sup>甲 藤十郎、あまりに、思ひ上つて居はせぬか！ 殿の御前だぞよ！

藤十郎 藤十郎、決して、高慢は申し上げませぬ。が、藤十郎が心の中をかゝる御大身に、御諒察願ふ事叶はば、それにましたる幸なしと、最前よりの申し條は、神の御さばきに出でたる心地で御坐ります！

主人 そちの心を余に解つてもらひ度いと申すのか……

藤十郎 御意に御坐ります。

主人 余も、そちに、余の心が分つてほしいと思ふのぢや……さらば、問はふが、今そちは、黄金の前には、藝を賣らぬと申したが、世の流説に、そちがある婦人に思はれた折、吾等の近づくべからざる御庭の牡丹を所望なし、もし叶はば言葉に従ふと申したと云ふが、それでも、

藝を賣らぬと申すか？ そちは、牡丹にその身の操を賣らふとしたではないか……

藤十郎 これは又異なる御言葉で御坐ります。その事は、一つの御伽ばなしとでも申しませうか、我等天上のものを求むるは、俗に申す出来ぬ相談で御坐ります。心はやりたる若き女性に、役者としての藤十郎、むげに冷たき事も申されませぬ……

主人 そちの三度の食事には、白米一粒づゝを選び分けて、飯に焚くと申すが、いかに全盛なればとて、あまりに潜上の沙汰ではないか、奢の極みと心得ぬか？

藤十郎 藤十郎は、只今、太夫元より一年千兩に近き黄金を以つて、やとはれて居る身で御坐ります。然るに、人は生身の、何時いかなる病にたほれぬともかぎりませぬ、まして、藤十郎、日毎日、舞臺の上にて、長いせりふを申すもの、萬一、飯の中に石あつて、私の齒を痛め、その爲、言葉のしどろもどろに相成らば、御見物に對しても、太夫元に對しても、全く相濟まぬ儀と心得まして、米を粒選りに致させます。はたから見ての奢りの沙汰も、かへつて、雇はれ人の悲しみに御坐ります……一々御言葉に逆らふ段、重々恐入りますが、藤十郎、云ひまかされて舞ふ程なら、夙くに御心に従ひます！ 役者の意地と申す事も、何卒御賢察下され……



主人 余も武士ぢや、武士にも意地がある、どうあつても、舞ふて呉れ!

藤十郎 藤十郎舞ひは不得手で御坐ります。藤十郎の芝居は、せりふばかりで御坐ります!

主人 然らば、そのせりふを聞かしてくれ!

藤十郎 芝居は、一人にては出来ませぬ!

主人 もう、絮くづう云はずと、何なりと、思ひついたまゝを、余の前に見せてくれ! 此の場の事を芝居にしてなと、早ふ何なりとも見せてくれ! 藤十郎、余も武士ぢや、何なりとも取らざる! 望みのまゝを叶へさす! 余が、たのむ! たとへいかなる望みでも、余は決して後へは引かぬぞ! 早ふ、舞ふてくれ!

藤十郎 藤十郎の心のまゝ、即興の一人芝居……それでも、強ゐると御意あそばすか……

主人 何なりとも!

藤十郎 然らば、御免下され!

と、立ち上る。

一同片唾をのむ。

藤十郎、よき所に立つて、身ぶりまぢりに、一人で芝居をする。

藤十郎 言語同断! いや世の中には、可笑しき事もあるものかな。その可笑しいなかにこれは又、仙臺彌五七に云はせたら、寝耳に牛が入りたるやうな可笑しいはなしで御坐ります。委しい事は存じませぬと、あらましの御物語申さふすれば、ある所に、一人の大名が御坐りました。イヤ、二人かも知れぬ、三人かも知れぬ、世の中には、慥した大名は澤山にある程に、百人の大名と申してもよい事も分りませぬ。その大名が、ある時、一人の美しい娘を町で見ましたのぢや。これも、一人には限りませぬ、此の大名なら、二人見ても、三人見ても、百人見ても同じやふな事をしやふと思ふので御坐りませぬから、さればとて、それでは命に限りあれば、此所では、一人と申して置きませぬ。すると、その大名早速家來を御召になつて、あのやうなよい娘は、大勢の人に見せて置くのはよろしくない、余一人で見やふとて、大枚のお金を出して、その娘をば買ひ取られ、御殿の奥の奥の間に、チンと置きものゝやうに入れて御仕舞ひなされました。娘を賣つた親は、豆腐屋にて、親爺よろこぶまい事か、一生豆をひいて居ても、娘一人を賣つた程にはもうからぬ、世に子寶と云ふが、その通り、娘は賣ぢやと、それから後は、その金で、畑を買ひ、自分が種まきの役になつて、一心不亂にほかの娘を拵へにかゝりましたが、娘は出来ずに、自分が佛になつて仕舞ひました。念佛に來られた坊さんは、その入り



訣を聞かしやつて、あーあ、世の中がわるうなつたわいとしみぐとなげかれましたとい。それとは別に、一人占めの味をしめた大名は、此度は、嵐山の櫻見物に行かれ、昔から名木の名ある櫻の見事にさいた花を見て、これも又、人に見せるはイヤな事ぢや、自分一人で眺めようと、よろこんで居る花見の見物を追ひちらし、この櫻をば根こぎにして、大名の庭へうつし植え、娘と櫻を、たがひちがひに眺めくらして居られたが、花はちり夏もすぎ、虫が鳴く夜に、大きな月を見つけたし、人々が、え、月や、今宵の月に似る月もなしとよろこぶのを耳にして、その月を又一人眺めんと、家來けん族よびあつめ、高い高い垣根をして、月を皆の眼から、さへぎらふとなされました。一人は垣の外に居て、大名は一人垣の中に居て、まだ、月が見えるかと云はれます。外のものが、まだ見えますと云ふと、それと又垣を高くさし、又見えるかと云はれます。まだ見えますと云ふと、それと又垣を高くしたが、それでもく月が見えるので、大名はイラ立つて、垣を天まで高くせいと云はれ、やふく天までの垣を作らすと、その中に月もうごいて、結局しまひは、世の中の人に見える月が、一人見やうとした大名丈に見えない事になりました。大名は嘆く、人は笑ふ、子供も笑ふ、女も笑ふ、ある所では、亭主が、あまり可笑しいと云ふて、椽からころけ落ち、そのすがたが可笑しいと云ふて、女房が笑

ひこけ、あまり笑ふて、下腹がつり上り、思はず赤子を生み落して仕舞ふた。これは目出たいが、又おかしな事ぢやと、ぢいも、ば、も笑ひこけ、ば、は願を外し、ぢ、は腰をぬかす、それが、おかしいとて、孫が笑つて、飴玉を吐き出した。之を犬が、なめたと云ふて、馬が笑ふた。猫も笑ふ鳥も笑ふ。草木の花まで笑ひ出して、アハ、オホ、フ、ヒ、と云ふ聲が、三日三夜さ休みなしに續いた想で、今にそれを思ふても、ほんに可笑しい、可笑しい、オ、可笑しい事で御坐りました。あらはづかしやく、さうやふさまへの御暇乞ひ……

と、身ぶり手ぶり、せりふまはし可笑しく芝居する。

家來一同は、主人が、笑はれ諷刺されたのに對して、いづれも、憤怒の思ひをなすが、主人丈は、反省と懺悔とにたへぬやふに、じつところへて、

主人 藤十郎、満足ぢや！

藤十郎 さらば、御暇致します……

主人 待て！ 約束通り、褒美を取らせる！ 何なりと申してくれ！

藤十郎 御心に叶ふたが、即ち御褒美、藤十郎、素より、何をか求めて致しませふ！

主人 余も武士ぢや、何なりともつかはさふと申したのぢや！ 遠慮なく申せ！ 早ふ申せ！



余を弄ばふと致すか！

藤十郎 以ての外で御坐ります。

主人 然らば申せ！ 黄金か、(藤十郎首をふる)衣服か？

藤十郎 失禮ながら、藤十郎、只今にては、暑さ寒さに事缺く事も御坐りませぬ。

主人 然らば、邸をつかはさふか。

藤十郎 さゝやかなるものなれども、河原町四條に、只今負請中で御坐ります。

主人 然らば、何が望みか………夙く申して見よ！

藤十郎 たつての御言葉、………君の御威勢にて………

主人 ムム——

藤十郎 そのお幕の邊かたがはの、松の木頂戴致したう御坐りまする！

主人 (幕の紐のくよりある松を見て) 何此の松を所望とな？

藤十郎 ひたすら、君の御威勢を以つて………

主人、じつと考へて居たが、ますます自分が苦しくなると云ふ風な表情で、息もつかずに居る。

藤十郎勝利を感じたる面持にて、静かに一同を連れて去る。家一同は、呆氣に取られて居る。

静かに入相の鐘の音。

風の音。



## 第三場

## 藤十郎の新邸

舞臺は、京都河原町四條に新築された、阪田藤十郎の家、庭に面した、離亭風に作られたる茶座敷。座敷は、敷奇を極めたるものにて、家の上手下手に、いろ／＼の木を植え、座敷の前には、美しく、うねりたる流れあり。家の下手、植込みの奥は、他の庭に通ずる心。前の場よりは、一年をすぎたる頃、所々に白き梅の花、木々の枝には、若き芽が、美しく紅らんで居る。

幕あく。

と、下手奥から、阪田藤十郎、江戸の役者山村平右衛門を供ひて登場。

藤十郎　そして、江戸へは何時御出立と極まりましたな？

平右衛門　さしつかへのない限り、明朝發足致し度いと存じては居りますが……

藤十郎　明朝御發足か……然らば、御はなし致すも、今宵一夜となりましたな。

平右衛門　思へば、長い滞在の間、一方ならぬ御懇情にあづかり、未熟なるそれがしを、一人前

の役者に御仕立て下されし御高恩は、とても、言葉を以つて、御禮申上ぐる事も出来ませぬ！江戸表に立ちかへり、此の平右衛門、幸にも、とかくの評判相立つやうな事も御坐れば、それこそ、一重に、御なさけの賜物で御坐ります。

藤十郎　いや、決してそのやうな事は御坐りませぬ、藝はその人にそなはるもの、それに、役者となつたる以上は、死するまでが修業故、此の後とても、その身一人の榮耀をのみ望まれず、芝居の爲、藝道の爲、一層精進致されよ。それがわれ／＼共の命ぢやと思ひます。江戸には、中村七三郎どのも在す故、此の後には、七三郎どのを師と御たのみなされ。

平右衛門　いろ／＼の御教訓恭けなう御坐ります。それがし、江戸へかへりましたら、凡て貴殿を手本として、芝居致す考へで御坐ります……

藤十郎　いや／＼、それは、以つての外的事で御坐ります。今少しく考へられよ。

平右衛門　藤十郎どののは、實事、ぬれ事共に天下の名人、然らば、誰れを手本と致したらよろしいので御坐りまするか？

藤十郎　人さま／＼の世の相、道行く人も、草も木も、水の流れも皆私にいろ／＼の事を教へてくれます。とかく芝居と申すもの、うそのやうに、大げさにするものと、世の人々に思はれ



て居りますが、常の如く、常の如くと芝居をするが、まことの芝居で御坐りませぬぞ。人の心に芝居を見、芝居の中に人の心を見せるのが、まことの事で御坐ります。藝は己れが、性根より一流仕出したるものこそよく、必らず、人を手本に致すべきものでは御坐りませぬ！ もし、それがしを手本となさば、必らず、それがしより劣るべく、大凡、眞似と申す事程、あさましい醜いものは御坐りませぬ！

平右衛門 ……………

藤十郎 (ふと氣をかへて) オ、もう木々の若芽がうつくしうなりましたな！ 世は春ぢや！ ……

あ、七三郎どのは、いかに御暮らしなさるゝか？ 江戸表へかへられたら、藤十郎、いつもいつもなつかしう思ふて居る山、くれぐれも御傳へ下され！ あ、又何時同じ舞臺に立つ事か…………七三郎どのは、實に名人であられたが…………

平右衛門 何かと、仕度も御坐りますれば、これで御免下さりませ！

藤十郎 いづれ、明朝、御見送りは致しますが、道中くれぐれも御いとひなされよ！

二人、しみくと別れを惜しみ退場。

鶯鳴く。藤十郎一人じつと思ひ入れ。所へ、近松門左衛門、金子吉右衛門登場。

近松 今日新築落成の御祝に御招ぎ下されありがたく存じます。

吉左衛門 さいぜんから、近松殿と二人して、すみぐまで拜見致しましたが、此度の御負請、間取りの工合、御庭の風情、まことに申し分なきもので、貴殿ならではと思ふ節々が御坐りまするな。たとへば、此所の廊下を辿つて行つた所に、恠うした室がほしいなアと思へば、その通りの室があり、明るい室があると思へば、物を案するにふさはしい静かな居間、夢見るやうな高どのもあれば、心の奥までしみぐする、あの御湯殿のさまなどは、全く貴殿の芝居をそのまゝ、木と土にて作つたものも、かうなりますと、立派な藝術で御坐ります。

藤十郎 狐狸の類すらも、己れが心のまゝに、己れの住む家を作るに、しばく間取りの都合の爲に、その日くの起き伏しをも、不自由にする人を見て、藤十郎、只々己れが、心持よう死すべき所を作り度いと思ふたまで御坐ります。

近松 まことに、住むべき家を持たぬ人ほど、あはれなものは御坐りませぬ…………此の身一つの置き所なら、木の下蔭も野末の小屋も御坐りませうが、心のすみかは、なかく得られぬもので御坐ります。

藤十郎 又、新しい淨瑠璃が出来ましたかな。



一同、極めて、明るい心持で、笑ふ。  
驚の聲。

藤十郎 新らしい淨瑠璃と申せば、又一つ御願ひ致し度い事が御坐ります。それは藤十郎、五十  
三歳、最早、濡事師でも御坐るまいと存じ、幸に死すべき家を得たるを機会に、着馴れたる紙  
衣をすて、何とか、新らしい道に踏み出て見度いと存じますのぢや。が、いつも申す通り、そ  
れがし、いかに心にもだえても、狂言なくば致し方なく、廢馬に等しきものなれども、何卒御  
力にすぎり、生くべき道を見出さるゝやう、御願ひ致します。それにつき、大和山甚右衛門こ  
そ、將來傾城買ひの役者として、適れなるものと存じますれば、よき折の狂言に、舞臺にて、藤  
十郎傾城買ひを指南して、紙衣をゆづる所を御仕組み願ひ度う御坐ります。それを一世一代と  
して、今日まで苦心致せし、藝の秘訣をいさゝか傳へ残し度いと心の願が御坐ります……  
近松 ハ、ハ、藤十郎どの、心に叶ふた住ひを得て、急に老人となられましたな、それでは私は  
四十四歳、そろ／＼心中物はやめなければなりません……イヤ、吾々に年はない筈ぢ  
や……

藤十郎 イヤ、藤十郎、先頃の狂言どもの役に、しみ／＼つたない藝にあきれ果てまし

た。そのはじめ私は、此度吃りの役に、ふだんようしやべる藤十郎、此度の狂言には物も云は  
れず、ほんに可愛想ぢやと、見物に泣いてもらはうと思ひましたに、初日二日、共に、見物衆  
は泣かばこそ笑ひたほされて仕舞ひました。四五日して、それをいろ／＼に考へ、まことのど  
もりを見ましたに、吃は、己れがどもりなる事をよう知つて居れば、常のはなしはゆる／＼し  
て、少しも吃りませぬが、うれしさ悲しさのこみ上げる時は、我知らずどもものぢやと、は  
じめて気がつきました。そして、その日からその通りに、常の時は、口の中にてひそかにども  
り、怒る時ばかり、言葉に出して吃りましたら、見物はみな、可愛想にと涙をこぼして下さり  
ました。藤十郎、五十三歳にして、はじめ、このやうな事を感じるは、よく／＼の下手役者、此  
の上藝は上らぬものぢやとさとりました。

近松 まことに……ねむつて居るものは、幸ぢやが、眼ざめた人は、常に苦しむもので御坐り  
ます。その苦しみが、やがて心の満足ぢや、いつもながらの御苦心の程尊いもので御坐ります  
な。

一同深い思ひ入れ。

と、上手奥より、都萬太夫、芝居のもの、多勢連れ、新築を祝ふ立派な品を持つて登場。



つゞいて、大工の棟梁その手下をつれて續いて出る。

萬太夫 今日の御招ぎに、御祝ひのしるし、心ばかりのもの持參致しました、何卒御受納下さりませ!

藤十郎 ありがたく頂戴致します。

大工の頭領 御祝ひの御酒、一同ありがたく頂戴致します。

藤十郎 いや〜長い事、さだめて、氣づまりな事であつたらう! 阪田藤十郎、生れて初めて、思ふがまゝの家に寝る事が出来たのは、全くそちの力と申すもの……忝けなく思ふて居る! 今日、心置きなう、みなで、くつろいでもらひ度いのぢや!

大工の頭領 ありがたう御坐ります。

と、手下を連れて去る。祝物を持った男共も退場。

藤十郎 太夫元どの、何卒金子五十兩、御用立下されぬか。

萬太夫 いと安い御用……

と、懷中から、小判を出す。

藤十郎 とてももの事に、歩に御かへは下さらぬか。

萬太夫 歩も、小判も、五十兩は五十兩、何故歩にかへと申されるのか。

藤十郎 その金子は、只今の大工につかはすもの、袂から人につかはす金、殊には、役者として、

小判にては、あまりに、いやし氣に見えますれば……

萬太夫、芝居のものを呼んで、小判を歩に代へよと命ずる。

藤十郎 何から、何まで、まことに、申わけが御坐りませぬ。……あ、思へば、藤十郎、一年三十兩程の給金にて、やう〜役者の末席に連なりし頃は、暮れの晦日に、そこばくの銀残して、のどかな春を迎へましたが、今千兩に近き身上となつて、とかく御迷わく相かくるは、まことに、耻かしき事なれども……此の不始末の心故、今日ある事とも存じられ、自分丈は諦めて居りまするが……

萬太夫 されば〜! 室の中には、加羅を焚き、魚類なくては膳に向はず、藤十郎は、乾澤ぢやと、世間の人の噂もあるが、わしは、その寛濶な心持に、千兩の金も拂ひまする……思ふさま使ふて下され!

藤十郎 ハ、ハ、そして、藤十郎、一生貧しうくらしませうかハ、ハ、

一同、又はれやかに笑ふ。所へ、藤十郎の家のもの、(弟子の役者)登場。



門弟 只今、若き御武家様、御供もなく只御一方、是非とも藤十郎に目通りしたいと仰せられて、御訪ねで御坐りまするが、……

藤十郎 何？ 御武士が御訪ね下されたとか…… して、御身なりは、御様子は……

門弟 何さま、御大家の、若殿様とも御見受け申す御方で御坐ります。

藤十郎 (しばらく考へて) ともかくも、御通し申せ！ そして、本日、當家に、心祝ひのある由を

も通じ上げ、只今藤十郎、衣服をあらため御目通り致すと、丁寧に申上げよ。

門弟 かしこまりました。

と退場。

藤十郎 いかなる御用ばしあつての事か…… ともかく、設の席にて、何卒御くつろぎ下され……

と藤十郎、靜かに退場。

一同反對の方に歩み出す。

——靜かに次の場にうつろ——

## 第四場

### 藤十郎宅の廣間

正面に、庭を見たる廣間。今日の新築祝ひの席にあてたる物にて、座敷の中は、それ／＼の裝飾あり、一隅に、いろ／＼の樂器などを置く。

上手床の間を背にして、若き武士、高木準人端然と座して居る。所へ、若き役者、美しきこしらへにて、茶菓子などを運ぶ。

しばらくして、衣服をあらためたる藤十郎靜かに登場。客に對して、いと丁寧にあいさつする。

藤十郎 いづれよりの御越しかは存じませぬが、手前は、阪田藤十郎で御坐ります。見ぐるしき所へ、ようこそその御入來、藤十郎、あつく御禮を申上げます……

準人 余は、高木準人と云ふもの、高木主膳の子ぢや……

藤十郎 と仰せられますると…… (と考へて) 拙者、いさゝか老謔致し、全く失念致しまして御坐りまするが……



準人 いや、そちが、余を知らう筈はない！ 只余の父上の御事は、よう知つて居る筈ぢや……

藤十郎 されば……高木様と仰せられましたな……

準人 いかにも……昨年、春、江洲石山にて花見の折、父上はそちに會はれ、そちから、いたくはづかしめられたと仰せられたが……まだ思ひ出されぬか？

藤十郎 ……

準人 父上、御酒興の上にて、そちに、舞ひを強ひられて……

藤十郎 お、昨年、江洲石山にて……お、藤十郎、初めて、思ひ當りました。

準人 思ひ出したか……

藤十郎 して、殿様には、絶えて久しく御目通りも致しませぬが、御健勝にて渡らせられまするか？

準人 父上は先頃、御亡くなりあそばされた！

藤十郎 え、(と一種云ふべからざる不安に襲はれる)

準人 そして、父上は、御存生の間に、そちに會へぬを、事の外残念に思召されたが、余も父上

の御心の中を思ふて、御無念の程さぞかと思ふのぢや！

二人の間にしばらく沈黙がつよく。

準人 余は、亡き父君の御使ひとして、そちに會ふのは、今が初めてぢやが、父君御臨終の御有様を思ふにつけ、石山の花見の折、そちが、舞ふてくれたらなアとうらめしう思ふぞ！ 父君も素より御酒の上にての御無體とは、よう御存じなり、余も、亦、昨年石山にて、父上のそちになされた事は、決してよい事とは思ふて居らぬが、余に取つては、天にも地にも代へがたい父上が、御臨終に只一つ御心に残された事があると思ふと、未憐らしうも涙が出る。藤十郎、見苦しいと思ふてくれるな！ (と、さめくと泣く)。

藤十郎 段々の御言葉にて、藤十郎、思ひ當りまするが、花見の席の御酒興と云ひ、又藤十郎が、なしたる事、さばかり御心にそむきし事かと、今更而目次第も御坐りませぬ、……今は、御面影すら、思ひ出されぬ程のはかなき御縁で御坐りましたが、……

準人 藤十郎、必らず、余が恨みに來たと思ふてはならぬぞ！ 余は只、父上の御使ひにまるつたのぢや！ 藤十郎、よう聞いてくれ！ (間) 父上は、去る年の秋の半より、かりそめ 苟且の病の床に入られ、それまでの御壽命か、貴い薬のきよめもなく、冬の最中にあへなく御なりあそば



されたが、かねて、その御覺悟で御坐つたか、御臨終の夜、母上と余とを、御側近く御召しあつて、それ／＼の御遺言の後、はじめて石山の花見の事を物語られた。父上の仰せには、その折、藤十郎も來合はせられたれば、盃を取らせ、余の前にて、舞ふて見せよと云ひたるに、藤十郎、斷つて辭退致すのを、酒興のあまり、武士の意地から、強ひて、強ゐて、余の我儘を通したが、藤十郎は、即興の芝居をして、した／＼かに余の我儘をば耻かしめた。一河原ものゝ、金銀さへつかはさば、何事にも爲すものとのみ思ふて居たが、余のあやまりにて、藤十郎程の役者は、全く稀れに見るべきもの、と、ほと／＼感じ入り、親しく手を取つても、わび度しとは思ふたが、家中の手前、そのまゝにもうちすてがたく、余は自らを、の／＼しられしを感ぜぬらしき面持して、芝居に對して、褒美取らせう、何なりと望め、黄金か、衣服か、邸かと、せめても、人に眞似られぬ褒美取らして、余が大ぶくの心を見せんと思ひしに、藤十郎、素より物を得やうとてなしたる事ならずと、たつて辭退致すのを、余は、猶更いらだ、しうなつて、強ひてのぞめと申したのぢや。余の權幕あまりにはけしかつたか、さらばとて、藤十郎は、側の松の太木を指さし、たつての仰せ故、御威勢にて、その松拜領したしと云ふた。……石山は、素より、私の土地ならず、ふと當惑せし間に、藤十郎は去んで仕舞ふた。何なりとも望め

と云ふた余の愚さ！ 酒興とは申せ、つゝしむべきは、はしたなき言葉ぞと、酔もさめ、暗き心で山を下り、永い間を、心のなやみにうちすごした。その後、それ／＼の手配を経て、石山の寺に乞ひ、やう／＼にその松申受くる事を得たが、名にし負う太木なれば、すぐに移し植ゑたらば、そのまゝに枯るゝは必定、さるにては、薪をつかはすも同然故、庭にうつして、枯れざるやう、春を待つてと思ふて居たが、余の命早やつきたり！ 松を持參し非禮をわび、快く物語り、その時こそは、藤十郎に、舞ひを所望致さんと、そののみ楽しみに思ふたが、それも叶はず此のまゝに相果つるは、いかにも心外なれば、余の亡き後、必らず、その松、藤十郎方に持參して、父の心中、悉く物語り、石山にて藤十郎に辱しめを受けなんだら、余はまだ／＼心奢りし愚か武士であつたらうが、藤十郎に教へられ、人並みのものになれたとつたへよと、涙の中に仰せられた。一日も早くその松を送り、父君の御心なぐさめんと存ぜしが、何かと手間取り、やう／＼今日、山より松をはこび下ろし、只今、京の町を引いてまゐる、亡き父上の御志、藤十郎、何卒快く受けて呉りやれ！

と靜かに物語る。

藤十郎 さては、いつぞや、藤十郎が、申し上げたるざれ言を、さほどまでに思召し、石山の松、



只今それがしに下さるとな……あゝ、大殿の御心の中、藤十郎、ひし／＼と此の胸にこたへまする。いや、その折も、御大身とは御兄うけ申せしが、かくまで深き御心の程も思はず、役者風情の分際にて、非禮の段々、藤十郎今更懺愧に堪へませぬ！……それに又、父君の御志を受つがせられ、若き御身を以つていろ／＼の御心づかひ、深き／＼御孝心の程拙者御禮の言葉も御坐りませぬ！伊達を生命いのちと生きてまるつた藤十郎、今日まで、かくまで胸を打たれた事としては御坐りませぬ！若殿！御志の程ありがたく頂戴致しまする！本日、此のさゝやかなる住ひの落成を祝はふとて、幸ひ一門うち揃ふて居りますれば、亡き殿の御志、目出度き松、一同にて御受け申上げたう御坐りまするが……

準人 それはそちの心まかせぢや！

藤十郎 ありがたう存じます……

と、次の間をむいて、一同を叫ぶ。近松門左衛門、都萬太夫、霧浪千壽、岩井左源太、尾上左近、袖崎源次、三笠成右衛門、ホネ屋庄右衛門、金子吉右衛門、その他、門弟等大勢出で来り、よきつふに居並ぶ。

藤十郎 皆々に申度き事あり、昨年、石山の花見の折、さる御大身の御盃頂戴なし、何なりと所

望致せとの御言葉にあまへ、藤十郎、ざれ言のやうに、御幕の邊そばの松の太木拜領致し度しと申し上げ、そのまゝ、打ち忘れ居りましたが、その殿先頃御他界遊ばされ、御遺言とて、若殿わざ／＼その松を御届け下されました。その松にもたとふべき、いさぎよき御心の程、藤十郎つく／＼と恐入り、御志の松、今日の祝ひに、一同打ち揃ふて頂戴致し度う存じます。御大身の御心の深さ、只々胸にこたへて、忝けなさ、勿體なさ、藤十郎涙を以つて、御禮申す他御坐りませぬ！

一同、若殿に對して、うやく／＼しく頭を下げる。

準人 いづれも、面を上げられよ、余は、只、父君のかね事大切に心得、御心安んじまらせんと思ふた丈の事なのぢや！

所へ、奥にて、聲を揃へて車を引いて来る物音きこえ、門弟一名あはたゞしく登場。

門弟 只今、表に、松の太木が、届きましたが……

藤十郎 そのまゝ、夙く庭に入れよ！早くせよ！

と、昂奮して、立ち上る。一同これにて、位置をかへ、皆庭の方を見る。

門弟又いそぎ登場。



門弟 夙く御庭に入れよと申しましたが、あまりの太木にて、木戸よりは勿論、塀も、家も取りこはさねば、とても御庭には這入りませぬが……

藤十郎 何？ 塀が、松を入れるゝに邪魔になるとか……（と考へ）塀も、家も、取りこわせ！

一同 えよ？

と驚く。

藤十郎 夙く、取り毀して、松を入れよ！

萬太夫 さればとて、今日、落成したばかりのものを……

藤十郎 塀も家も、又作れば出来るもの！ 亡き殿の御志、黄金にては買ふべからず！ その尊き松の一片を枯らしても、藤十郎、そのまゝ最早や男でない！ 夙く毀して松を入れよ！

と、きつぱり云ふ。

一同 その意氣にうたれる。

準人 藤十郎！ さだめて父上の御尊靈も御よろこびであらう！ 余も、うれしいぞ！

藤十郎 若殿！ 父君の、御靈前への御手向けとして、藤十郎、今こそ、快く舞ひまする。

準人 藤十郎、そちの心は、必らず父上にも通じやう！ 余はもう何も云はれぬを！

藤十郎 藤十郎の心の喜び、若殿、御覽下され！

準人 さらば、余が、鼓打たう！

藤十郎と二人、じつと顔見合はせて、しばらく、感激の涙にむせぶ。

藤十郎、扇を取つて、かまへ

藤十郎 扱松はさしも實に……

準人、鼓を取つて、打つ。

一同 枝をため、葉をすかして、かゝりあれと植置し其甲斐今は嵐ふく……

と、藤十郎舞ひかゝる。

一同、感激に満ちて、舞臺には大いなる喜び充ちあふれる。

藤十郎舞ひながら……

——靜かに幕——

附言

最後の舞の邊、方式には、かなつて居まいが、演劇的效果を主として故らに、憚したのである。



櫻  
咲  
く  
頃  
一  
幕



## 登場する人々

中野敏郎(銀行員)	四十八歳
おしゆん(その妾)	三十五六歳
信太郎(おしゆんの子)	八歳
幸子(おしゆんの子)	六歳
女中しづ	二十歳前後
隣家の妻君	二十五六歳

舞臺は、小庭に面した茶の間と之れに續いた八疊の座敷との間で、茶の間は下手よりに、座敷は上手寄りに、凡て二重屋體に作られる。茶の間には長火鉢や茶籠筥が置かれて、下手の障子の外は臺所で、正面奥の襖を越して玄關に通じて居る。

座敷には床の間があつて、神様に縁のある軸物が掛つて、床の間につよいた壁には黒塗の立派な佛壇が飾つてある。

四月初めのある夕から宵にかけての出来事である。

おしゆんは、流い銘仙の綿入れを着て鏡臺に向つて鬢を直ほして居る。ほつそりした姿で、顔つきは淺黒くきりつとした方で、水々した眼の中に、ヒステリカルな光が宿つて居る。

座敷の真中に、信太郎と幸子とが二人で、何かして遊んで居る。信太郎は母のおしゆんに酷く似た顔立で、一體にかぼそく弱々しく出来て、黒い眼や、こめかみの青筋やらに痛癢らしい所が見える。幸子は、まるくと肥つて全く代表的な女の子で黒い髪の毛がふさ／＼して居る。

かうした沈黙がしばらく續いて居ると、やがて子供二人は喧嘩を始めるが、男の信太郎より妹の幸子の方が常に優勢で、時々兄貴をつきたふすが、最後には兄貴に負けて火のつくやうに泣き出す。

おしゆん(髪を直ほす手を止めて) 又! どうすればさう喧嘩ばかりするんだらう、兄さんも大きな風體して何ですか——あーあ、もう御だまりな幸子さんも、自分から兄さんに掛るから悪いんぢやないか——もう御止めと云ふのに! まだするね、ようし! 今に御父さんが來たら二人共云ひつけてやるからいゝ、

幸子 母さん御免なさい——

おしゆん 本當に御免ですか?

幸子 御免なさい——



おしゆん ぢやもう喧嘩をしませんね？ 女の癖に！ きつと御免ですか  
幸子 御免——

おしゆん 兄さんも御免ですか？

信太郎 御免たないやい！

おしゆん 何ですと？ けんかをしてもいいんですね？ そんな事學校で教へたんですか？——

兄さん？——そんな事で怎どうなります。學校行つても何にもなりやしないけんかばかりして——  
皆母さん云ひ付けてやるから——

信太郎 御免下さい

おしゆん 隣の兄さんを御覽なさい——あゝして、毎日學校から歸ると大きな聲で御さらひして、

御使に行つたり赤ちゃんを負おつたりしてゐるぢやないか——御父さんも、信太郎は學校行つてど  
んなに豪くなつたかと楽しみにして入らつしやるのに、そんな事でどうなります——今日御父  
さんが入らつたら、ちゃんと御浚はひをして見るんですよ。

信太郎 うん！

おしゆん 出來ますか？ え？ 出来る？——やつて御覽！——否いやな事がありますが、母さんの

前で一度やつて御覽、——ぢや出来ないんだね？

信太郎 出來らい！

おしゆん 出來らいた何だい！ 出来るなら此所でやつて御覽、さあカ、パンカ、パンを持つてらつしやい。

おしゆんは、机の代りに、ぢやぶ臺の足を擴げて待つて居る。信太郎は、カパンカパンを持つてその前に座  
つて、やがて一冊の本を出して臺の上に置く。

おしゆん 姉あねや——鏡臺をかたづけとくれ

家の外で、はいと返事が聞こえる。しばらくして肥つた女中のおしづが鏡臺をかたづけに来る。

おしゆん 今日は何所を教つたの？ 初めだらう？——さあ讀んで御覽——

幸子は、何時の間にか、臺のそばに来て、膝に手を置いて坐つて居る。

おしゆん 幸子ちゃんは、いゝ子ね、おゝ音無しい事、さうして兄さんの勉強を見て、今に女學  
校へ行くんですよ——さあ靜かにして拜見してゐるんですよ！ いゝ子、いゝ子！ さッ兄さん  
初めから讀んで御覽——此の字は？

信太郎 ハ——

おしゆん さうく、ハ——それからこれは



信太郎 バ——

おしゆん さうくく、タ——二つ一所にして讀むとどうなるの？ そら此所に畫がある、これを知つてるだらう？

信太郎 うん！

おしゆん 讀んでごらん——畫を讀んぢや駄目ぢやないか、さあ字を讀んで御覽——

信太郎 ハハ

おしゆん そんな小さい聲でなく、學校で讀むやうに大きい聲で——

信太郎 ハハ

おしゆん ハバぢやない、ハタ——ハータ

信太郎 ハーバ

おしゆん バぢや無いタ——ハータ

信太郎 ハーバ

おしゆん タ——

信太郎 (大きな聲で) バ——

花菱脚本集

櫻咲く頃

おしゆん 恚云ふの、口を結ばないで、タ、タ——云つて御覽——

信太郎 バ——

おしゆん 兄さん、まだ直らないんだね、よく母さんの云ふやうに稽古して御覽——ハ——

タ——

信太郎 ハーバ

おしゆん ハータ

信太郎 ハーバ

おしゆん 駄目々！ どうして出来ないんだらうね！ほんとに！ タだよ！ タツてツて御

覽！ タ

信太郎 バ

おしゆん 情けない子だね！、タだつてつたら

信太郎 バ——

おしゆん アーア——御前母さんの云ふのが分らないのかい

信太郎 分つてます



おしゆん 分つてるなら云へ想なもんだね、タだよ、タア——だよ！ ねッ、分つたらう

信太郎 えい

おしゆん ぢや御願ひだから云つとくれ！ ねッ、タッて云つとくれ——一所に

おしゆん タ

信太郎 バ

おしゆん 口ん中を御見せ——あーんと開いて御覽——怎か成つてるんぢやないか知らん—

——さあ、恚してるから云ッて御覽

信太郎 云へない。

おしゆん ぢやもう一度——タだよ

信太郎 パ——

おしゆん 唇をくつつけるんぢや無いつてのに——

おしゆんは、思はず信太郎を打つ、信太郎は、背筋を太く出して、いと悲し氣に泣き出す。幸子も一所に泣き出す。とおしゆんも悲しくなつて三人共一所に泣き出す。

女中が驚いた顔をして臺所から覗きに來て、靜かに姿を消す頃に、子供二人は母の泣くのに自分等は

泣きやんで不思議想に眺めて居る。

信太郎 もう一度云はして下さい

おしゆん もういゝ——親不幸！

信太郎 親不幸ぢやないから——もう一度云はして下さい——

おしゆん もう云はなくつてもいゝ——あーあ親泣せだね！お前は——人並に口が利けないなん

て、信ちやん耻だよ！

信太郎 云へますから、もう一度云はして下さい——御願ひですから——云へる！ 云へる！

おしゆん ぢや一度丈—— さあ——

信太郎 バ——

おしゆん それ見た事か！ もういゝ！ もういゝ——

信太郎は、机につぶして泣き崩れる。母のおしゆんは、何か念するらしい眼つきをして、ぢつと一方を見つめて居るが、しばらくすると、その眼から涙の玉が留め度もなく流れ出て來る。

おしゆん 云へないのかね——片輪なのか知らん——利口な子だのに——

幸子 母ちやん、妾云へてよ



おしゆん 幸子さん云へる？

幸子 え、

おしゆん ぢや云つて御覽

幸子 六——

おしゆん 六ぢやないのよ、七——ハ——タツて云へるだらう

幸子 ハ——バ——

おしゆん そりや兄さんの眞似ぢやないか、ハ、ハ

幸子 ハ——タ——

おしゆん 御覽！ 兄さん、幸子さんだつて、ちやんと云へるぢや無いか——御前に云へない事

があるもんか、泣いてないで云つて御覽

幸子 ハ——タ——

おしゆん さうく——幸子さんは、音無しくしてるの、だまつてるんですよ——さッ信太郎、

云つて御覽！

幸子 ハ——タ——

おしゆん 御前ぢやない——兄さん

幸子 ハ——

おしゆん 云へないのかい？——早く云つて御覽！ 母さんもう動悸がして来たから、早く——

早く——云へないのかい？

信太郎 云へます、云へます！

おしゆん 早く——

信太郎 ハ——バ——

幸子 兄さん、ハ——タ——

おしゆん まだ云へない！ 片輪もの！ 嘔！——もう云はなくなつてい、

信太郎 もう一度云はして下さい！

おしゆん もういい、そんな分らない子は母さんの子ぢや無い！ そんな子は持たない！

信太郎 母さんの子だ！ 母さんの子だから云はして下さい！ 御願いだから云はして下さい！

おしゆん 分らないから駄目です。

信太郎 分つてますから云はして下さい、きつと云へるから云はして下さい



おしゆん それぢやこれ一度ツきり！ 此度云へなければ母さんの子ぢや無いよ！ さあ、ちやんと覺悟して云つて御覽！

信太郎 ハ——ハ——

信太郎 いひ了ると、「イー」と齒ざしりをして、讀本をめちやくちやに破つて悲鳴を上げて泣く——。

母のおしゆんは、立ち上つて、ふら／＼と座敷の中を歩む。

おしゆん 何です！ 自分が出来ないで本なんぞやぶいて！ もう學校も下ける！

信太郎 御免なさい。

おしゆん 成りません！ もうどうしても母さんの子ぢや無い！

信太郎 母さんの子だア——母さんの子だア——

おしゆん 成りません、そんな口の利けない子なんぞ母さんは持ちません！

信太郎 云へますから母さんゆるして下さい！ 母さんの子にして下さい！ あーあ口惜しい！

信太郎は身をふるはして泣き倒れる。

庭づたひに、隣家の細君が静かに這入つて来る。

隣家の細君 坊ちやん！ どうなすつたの？——小母さんとこへ入らつしやい

おしゆん ほんとに御耻しいやら情けないやらで——先達からどうしても云へないでしてね——

隣家の細君 そんな事は御座いませんよ——よく痢で云へない子も御座いますからね、その中に

は云へますよ奥さん

おしゆん さうでしょうか——どうぞして云へるやうになればいゝと思ふんですけど

隣家の細君 云へますとも！ ねー坊ちやん、小母さん所で御稽古ませう——ねッ、御菓子を

喰べながら——直ぐ云へますよ！——あんまり御責めになると猶の事いけますまいよ奥さん！

おしゆん でも——妾自分で口惜しくなりますんでね——

隣家の細君 さあ、坊ちやん入らしやい！ 泣かないでね、母さんの子にして上げますから入ら

つしやい

幸子 小母さん、幸子は母さんの子なの、云へてよ、ハ——タ——

隣家の細君 おゝえらい／＼！ 兄さんだつて云へますとも！ 兄さんですもの！ さッ入らつ

しやい——幸子さんも入らつしやい

おしゆん そんなら小母さん所へ行つてらつしやい、さうしてよく教へて戴いて、御父さんの見

える迄にちやんと云へるやうになつとくんですよ！ それ迄母さんの子にしといたけますけど



もね、もし御父さんの前で云へなければ、その時はもうイヤですよ  
隣家の細君 分りましたね——、さあ行きませう——

隣家の細君は、子供二人を連れて去る。残ったおしゆんは、しばらくしてから佛壇を開いてしきりに合掌して念じる。

夕方の風が吹いて来て、いろ／＼の物賣る聲や夕の鐘がノリ亂れて響いて来る。庭の櫻の花が二三片散つて来る。

おしゆんは、我を忘れて念じて居る、折々ス、ス、ス、と息を吸ひ込む音がする。

と、門が開いて、赤ら顔のおしゆんの旦那の中野敏郎が静かに遣入つて来て、立ちながらおしゆんの念するのを見て居る。やがて、インパネスの釦を一つづゝ外しながら、一度『おい！』と呼んで見る。まだ氣がつかないので、もう一度『おしゆん』と呼んで見る。まだ返事がないので、獨りで笑つて、火鉢の側に座る。

敏郎 おい、おしゆん！

此の時、おしゆんは氣がついてふりかへる。

おしゆん まあ——

敏郎 何をしてるんだ。

おしゆん 今鳥渡——子供の事で——

敏郎 又死んだ御ばあさんに願うたんか

おしゆん えい

敏郎 それで叶へて下さるのかな

おしゆん えい、何でも——

敏郎 さやうか——子供は？

おしゆん 今御隣家に——

敏郎 信太は學校に遣入れたそやな

おしゆん えい、やうくと——でもまあ嬉しう御座いましたよ、高千穂學校は日本一だ相でして

ね、そりや大變な願ひ手なんですから——

敏郎 そうか——まあよかつたなア。それで御前も安心やらふ——

おしゆん えい、どんなに安心しましたか、今はもう子供の育つのが何よりの楽しみなんですか

ら——その子に妾の力一杯をかけてるんですから——もしもの事でもあれば、きつと妾子供の



爲に死ぬだらうと思つてゐるんですよ

敏郎 まあ、女の方はどうでも、信太郎は、立派に育ててもらはんとな、私も心配ぢや、外に子供は幾人あつても、私はあれが一番可愛いんぢや——いろいろ問題の起きた時分やし、御前もあの頃苦勞した時分やさかい——ほんまに私の子としてしみじみ思ふなア信太ばかりや——呼びにやらんか

おしゆん え、——姉や——鳥渡御隣家へ行つてほつちやんにも幸子さんにも御父様が入らしつたと云つといで

女中 (臺所で) はい

敏郎 御前氣色が悪いんかい?

おしゆん い、え、そんな事はありませんけど——此頃妙に逆上たり何かして、時々ふらくとなるやうな事があるんです——しばらく入らつしやらないと、女ツ切ればかりですから、何かと心細い事なんかあるもんですからね——尤も時候の故もありませうけれど——やつぱり忙がしいんですか

敏郎 相變らずな——

おしゆん 奥さんは?

敏郎 相變らずよ

おしゆん 御ばあさんは御達者なんですつてねツ——此間本郷のが云つてましたけど、妾はやつぱり御ばあさん丈には今でもしみじみ御目にかゝりたくつてならないんですよ、あの時だつて、それからだつて、いろいろ心の底にしてみるやうな親切な事を云つても下すつたし——それに、内所ぢや、やつぱり信太郎も見たいと仰有つたり、妾の事なんぞもしよつちゆふ思ひ出して下さるんですつてねツ——ほんとに、い、方ですわ

敏郎 え、人にはちがひないな

おしゆん 大切にして上げて下さいね——御目にかゝる時もあるまいけど、妾はほんとに考へ出すんですよ——一番しまひに云つて下すつた事なんかをね

敏郎 何を——?

おしゆん え? あの時の事ですよ、安心して居ろ、今にきつと圓く行くやうになる、子迄ある嫁をとやかう云ひ度くはないが、妾は、御前の世話になつて死にたいと思ふなんてねツ、嘘にもうれしいぢやありませんか——その後その言葉が頼りでもつて、何時か何時かと思ふ中に、



もう十年になりまさあね——とうとう一生御妾おかけでしたハ、

敏郎 うーん……

おしゆん あなたの御家へも遣入れず仕舞ひで、日蔭者あつかひにされちやつて——まあ妾なんぞ、花なら咲ききらずに散つちまうつて奴なんですねー

敏郎 どうだかなア——もうそんな話はをいたらどうや

おしゆん え——けど、いつも云ふやうですけど、信太郎の籍丈でもどうにか成らないもんでしようか、男の子ですし、それに學校やなんかの事で、イヤですしね、當人だつてあんな女々しい子ですから、そりやあ分るんですもの

敏郎 それについても、いろくくと考へては居るがなア、まあ今しばらく待つてんか

おしゆん こんな事は、考へ出した時にしないぢやあねー、年が年中籍の事ばかり氣にもしてられない中に、子供はだんく大きくなるし——

臺所から、幸子が走り込んで来る。その後から信太郎が、しほれた様で這入つて来て隅の方に座る。

幸子は、いきなり父の首にすがりついて『御ほうさま』と云ふ。

敏郎 お、幸子か——御ほうさんが来たぞ！ 大きくなつたなア、どれく——お、信太郎も

来たか？

信太郎 御ほうさま入らつしやい

とうやくしく首を下げる。

敏郎 よしく行儀がえまな學校に行つとるか——

おしゆん 御返事しないか四月の一日から参つとります——

信太郎 四月の一日から、毎日まるつて居ります——

敏郎 さうか、えまなア、豪くなるんだぞ！——

おしゆん はい——と

信太郎 はい——

敏郎 おや？ もう一度こちらを向いて見い！ 此の子先からあんな眼しとつたかいな

おしゆん どれ？ どうもないでしょ

敏郎 いまや——

おしゆん あ、片方へ玉がつれるやうに寄るんでしよう——時々あなるんですよ、カンの故  
 なんてでしょう——カンの強い子ですから——



四方が段々暗くなつて来る。おしゆんは、雷氣をつける。

おしゆん さあ、皆御はんにしませうかね

敏郎 あゝ、すしを持つて来たから

おしゆん おや、お父さまが御土産を下すつた——何てうれしいだらう、皆音無しいからですよ

——さあ、いたゞきませうね

おしゆんは、ちやぶ臺を出して、その上にいろ／＼のものを載せる。女中は家で出来た御馳走を載せる。そして臺所から、小さいかん徳利を持つて来る。皆は臺のまはりに座る。信太郎一人離れて居る。

おしゆん 御前何かい、御なかはまだ減つてないかい？

女中 はア。

おしゆん そしたら、あんまり遅くならない中に御湯へ行つて御出で、御前のは馬鹿長いんだか

ら——

敏郎 これから御嫁に行くのやからなア

おしゆん いゝえ、どこを洗ふんだか、そりや長いんですよ——ちやあね、よごれものは、御膳のまんま妾が下けとくからね、歸つてから片づけとくれ

女中 はい——

おしゆん けど、冗談ぬけ、御膳前であゝ長いと眼を廻はすよ

女中 はい——

女中は臺所に去る。

敏郎は酒をのみながら、子供やおしゆんといろ／＼の話をする。

敏郎 信太郎——これをお上り

信太郎 え、——

敏郎 男のくせに遠慮するもんやない

信太郎 え、——

幸子 御ほ、うさまあたしにも——

おしゆん コーレ！ 何ですか

敏郎 よしく、幸子にもやる——信太郎御上り、どうしたんだ涙ぐんで——何處か悪いんやないか  
おしゆん どうかしたのかい？ 御隣家で何かいたゞいた？

信太郎 いゝえ



おしゆん ならいたゞけるだらう——

敏郎 イヤならよせ——あゝあ、こつちで可愛がる子はどうも打ち解けんもんや——親となると、かへつてかうしてからまりつかれるのが嬉しいもんやけど——信太、御ほ、うさんはきらいか？

おしゆん そんな事はあるもんですか

敏郎 いゝや、私は時々さう思ふぞ、勝気なお前が諦めて居る事を、此の信太は諦められんで居るのやないかとなア——御前やかて諦めとりやせんのかから——信太は御前の血を受けとるし——

おしゆん ——

敏郎 けどなア——世の中の事は、思ふやうにはかりはならんのかから、私は私で、今のまゝでもさのみ不足はないのや——そりやお前から見たら——私の爲に一生日蔭者になつたのやから——

おしゆん もうくよしませうよ——子供の前ですから——そんな事はありやしませんよ、愚痴ですよ只——ほんとにそんな事は考へてやしませんよ！

敏郎 さうか——

しばらくの間、沈黙がつゞく。幸子は、何時の間にか、うとくと睡り始めて居る。

おしゆんは、座敷の方へ手早く子供の蒲團を延べて又座にもどる。その間信太郎と父と二人物語る。

敏郎 学校は電車で行くんかな

信太郎 え、

敏郎 うれしいか？

信太郎 え、

敏郎 勉強してな、豪くなつて呉れよ、今に御ほ、うさんが御ぢいさんになつたら、信太郎は可愛がつて呉れるだらうなア——えらくなつて、大きい家に住んで、そうして御ほ、うさんを大切に  
して呉れるなア——よしよし、それから、男は活潑にして何でも遠慮なんぞしたらあかんぞ！  
何にも怖いものは無いと云ふ氣で居んと駄目やぞ！

信太郎 え、

敏郎 信太は何になるんだ？

おしゆん 学校の先生になるんですとさ

敏郎 小學校の先生か？ イカン、そんなものはイカン！ 軍人になれ！ 海軍がいゝ、山本



ゴンベのやうなのでない海軍大將になつて呉れ——それが御ほうさんが信太に願ふたつた一つの事や

おしゆん 體が弱いから——

敏郎 御前がそんな事を云うたらアカン——まあ何でもええ、勉強して豪くなるんぢや。學校は出来るか

信太郎 ええ

敏郎 出来る？ さうか、そんなら、今御ほうさんの前で本を讀んできかして呉れんか——うまく讀めたら、時計を買つてやるぞ——さあ讀んで見い——

おしゆん さあ讀んで御覽——もう大丈夫、さつき母さんが御ばあさんにちやんと願つて置いたからね、きつと讀めるよ！ きつと讀めますよ！ 讀んで御覽！ カバンを持つて來て——

と云ひながら、幸子をそつと床の中に入れる。信太郎は、カバンを持つて來て、讀本を出して臺の前に座る。

敏郎 豪うなつたなア、こんな立派な本が讀めるのか——

おしゆん 初めつから讀んで御覽——

信太郎 ——

おしゆん さあ、御ばあさんが付いてらつしやるから大丈夫讀めるよ！ きつと讀める！

おしゆんは、しきりに念じ始める、信太郎はしばらくして、震へながら大きな聲で——

信太郎 ハ——バ——

と讀む。

敏郎 ハ、ハ、ハ——バぢやない。ハ——タ

おしゆん さあ、もう一度讀んどくれ！ しつかりと！

信太郎 ハ——バ——

敏郎 タ

おしゆん もう三度目だ、此度はきつとよめるよ、讀むんだよ、此度出来なければ、母さんの子

ぢや無いよ！ 御願だから、人並に讀んどくれよ！ 信ちやん

信太郎 ハ——バ——

おしゆん あー、駄目だく！ 皆駄目だ！ 妾の願つてる事もみんな駄目だ！ あー、親不幸！

畜生！ 片輪——



敏郎 おしゆん！ 何や！ どうしたんぢや！

信太郎 母さん、許して下さい、母さんの子にして下さい！ もう一度讀まして下さい

おしゆん イヤだく、もう私の子ぢや無い！ 私はそんな子はない！

信太郎 母さん許して下さい！ もう一度讀まして下さい、讀めるから讀まして下さい

おしゆん イヤだく、もう御前なんぞは死んで御仕舞ひ！ もうく、母さんの子ぢやない

敏郎 馬鹿！ 氣狂！

おしゆん 氣狂ですとも！ こんな私生兒があれば誰れだつて氣が狂ひます！ 人並の口が利け

ない子なんぞを持つて——親不孝！ 片輪！

敏郎 今に直ほるわなッ——そんな事心配せんでもいゝ事やないか

おしゆん 直りません！ 佛様迄願つても駄目な奴なんぞ、もう直りまん、死ね！ 御前は母さ

んの子ぢやない！ 因果！

敏郎 心配するなよ！ 母さんは、御酒に酔うてあんなになつとるんやからなッ、よつばらひや

からな！ 信太は母さんの子でなければ父さんの子になつて呉れ！ 心配する事はない！ ふ

るへる事なんぞない——さッ、もうねろ！ なッ、父さんが寢さしたらう

敏郎は、無理に、信太郎を寢床の中に入れる。信太郎は、そこでしくく泣いて居る。

おしゆんも、段々靜かになつては來るが、涙は瀧のやうに流れて居る。

敏郎 おしゆん！ 久しぶりで私が來たのに、どうしたんや！ え？ 落ついて呉れんか

おしゆん 落つけません！ あの子は駄目です！ 私はあの子の爲に死ぬんです、苦勞して苦勞

して死ぬんです！ さう云ふ因果なんです！

敏郎 あほらしい事を云ふなよ！ お前のやうにさうものを案じたら、なほく、子供がイヂケ

て仕舞ふがな——大きい心で居んとそりや駄目やぜ——あんなものは大きうなれば自然となほ

るもんや——兄貴の子なぞ、今年六ッやけど、まだ何も云へんで——なア、どうぞ子供は、應

揚に育て、呉れ、御前にやられたら皆狭い見の女子のやうに成つて仕舞ふわハ、

おしゆん あ——あ、妾の辭に子供なんぞ持つもんぢありませんねッ——そんな心もなかつたもん

だから——妾なんぞ、一生一人で居てさへ苦勞は絶えないのに、子供なんぞ二人も出來て——

こんな風ぢや、もう私が今にイキつちいますからね——それが心細くつてなりませんから、

どうぞ來られたら始終來て下さいね——これが、御父さんも此所で死なれる家だつたら、どん

なにか安心でしようけど——御父さん、ほんとにどうにかならないんですかね——……なら







夕  
顔  
の  
花  
一  
幕



## 登場する人々

中野敏郎(銀行員)	四十八歳
おしゆん(その妻)	三十五六歳
信太郎(おしゆんの子)	八歳
幸子(おしゆんの子)	六歳
女中 つぎや	二十歳前後
隣家の妻君	二十五六歳
主治醫 小倉順一	三十七八歳
近所の醫者 川井健哉	四十五六歳
近隣の人々	
硬質陶器の行商人	

舞臺は、小庭より見たる座敷、上手よりやや斜めに屋臺を作る。屋臺の下平舞臺は庭で、舞臺の中心に近き所を座敷とし、これにまわり縁をつけ、上手座敷に續いて、三尺程奥によりて、やや廣き臺

所の板の間が見える。下手庭の向ふは、杉の生垣にて隣家に接す。上手、臺所の土間を出づれば、勝手口への出入り口ある心にて、御用きなど其所より入り来る。隣家との境の杉垣の向ふ、車井戸あり。

座敷の中には、下手を枕に、信太郎が床の中に寝て居る。枕元には、玩具箱、繪草紙の類が散亂して居る。信太郎の枕にして居る方の縁側には、夕顔の鉢、軒には、小さな蟲籠がつるしてある。

信太郎の床の側に、丸髻のおしゆんが、行水後薄く白粉をぬつて、粹な浴衣に、黒縹子の帯をしめ、しきりに小説本の話をしてきかして居る。庭には、お河童さんにした幸子が、泥いたづらをして居る。臺所には、鼠入らず、セリンなどの臺所道具の外、瓦斯竈が据えてある。

八月下旬の夕方より宵の出来事。

信太郎 (母の談をきゝ終りて) それぢあ、清一は死ぬの母さん?

おしゆん あゝ、お酒を飲まされて殺されるんだよ——可愛想に!

信太郎 子供が御酒を飲むと死ぬんでせうか?

おしゆん 病氣揚句だつたもんだからね。(間) だから信ちゃん今が一番大切なんだよ。折角これ迄に快くなつたんだから、今少し喰べものさへ我慢すれば、元の體になれるんだからね、我儘



云つちや不可いけませんよ。(信太郎の顔を見て)分つた?

信太郎 えい

おしゆん 此の上喰くべ物で失敗しきじたら大變だよ。喰くべ物で失敗しきじるのは餓鬼がきだよ  
信太郎 餓鬼がきつて何なに?

おしゆん 死んでも地獄の底へ落ちるのさ

信太郎 僕死ぬなアイヤだなア

おしゆん 死ぬのがイヤなら母さんの云ふ事を肯ういてればいいのさ

信太郎 云ふ事肯うきます!

座敷の奥より女中つぎやが静かに這入つて来る

つぎや 奥様、御坊おぼつちやま様の御ごかいをかけませうか?

おしゆん 今何時いまだい?

つぎや 六時ちよつと前で御座ごいます

おしゆん そんなら、半すぎしてからでいいよ。(間)その前にね、庭へ少し水を撒いて御呉ごれ

つぎや はい

女中は、臺所へ出て、そこから下駄くだを穿きいて、手桶てづくを下くだげて庭を横切つて杉垣すぎがきの方へ行く。

おしゆん 何處どこへ行くんだい御前?

つぎや ヘツ? 御隣ごとなりの水を撒まぎませうと思つて、家うちのは、今日は又大變濁どろつてますから——

信太郎 どうせ泥どろにやるんぢやないか

おしゆん さうだよ本當ほんとうに、撒水まきずなんざ何だつていゝやあね。さう御隣ごとなりのばかり汲くんでる中に、御隣ごとなりが濁どろつたら妾達めかけの飲み水のみみづが無なくなつちまふぢやないか(間)雨は降ふらないかねーほんとに、水に不自由ふじゆうするなんて、新開町しんかいまちはこれだからイヤだ!

女中は黙もくつて臺所の方へ去る。と、杉垣根すぎがきねの向むかふから、隣家の妻君となりのつまが、浴衣ゆかたを着きて、夕顔ゆがなの鉢はちを持もつて笑わらひながら這入はいつて来る。隣家の妻君となりのつまとの話の間に、女中は庭に水を撒まく。

隣家の妻君 どうも、ありがと存ぞんじました。(と夕顔の鉢はちを縁側えんがわに置いて)坊ちゃん、いかゞです?

信太郎 もういゝの

おしゆん 『もういゝの』つて御挨拶ごあいさつがありますか。ありがと存ぞんじます。御蔭ごかげ様で、段々だんだんよろしくなりましたつて云ふんですよ。(隣家の妻君の顔を見て)ほんとに、我儘わがままもんで——

隣家の妻君 その方がよろしいんですよ御子ごこさんは



おしゆん たつた一人の男だもんですから、爲たい三昧をさしとくもんで——(と夕顔を見て)もう  
 咲かなくなりましたか、これは?

隣家の妻君 はあ、昨晚でもう蕾が御仕舞ひになりました

信太郎 そんなら、小母さん、あれ(縁側の夕顔を指して)を持つてらしゃい。あれ僕の夕顔だから。

おしゆん ほんに、坊やのが一番蕾が多い

隣家の妻君 よろしう御座いますよ奥さん。折角御丹精になつたのを——御宅で御覽になるのが  
 無いぢや御座んせんか

おしゆん い、え、家は、子供ばかりで、早く寝ちまふんですから、見る暇がないんですよ。(同)

御宅は旦那様が御遅いから(同)ほんとに、あれを御持ちなさいましょ

隣家の妻君 (躊躇しながら)ありがとうございます。

おしゆん よろしいですよ。その代り御宅の朝顔は、毎朝家で拜見するやうなもんですからホ、  
 ホ。

隣家の妻君 ほんとに、夜分遅いと、つい朝遅くなつて——

おしゆん でも、御楽しみですわね、遅くつても何でも、毎晩旦那様が御歸りになるんですから

(同)此頃、ちつとも来ないんですよ奥さん

隣家の妻君 やつぱり御忙しいんですか?

おしゆん 何が忙しいんですか。(隣家の妻君が立つて居るのを見て)まあ、お掛けなさいましな  
 ね

隣家の妻君 え、

隣家の妻君と、おしゆんとのほなしの間、信太郎は、庭に居る幸子を呼んで、御菓子屋ごつこを始め  
 る。水を撒き了つたつぎやは、臺所で手紙を書き始める。子供二人は、『御くんない』『へい入らつ  
 しゃい、御いくら差上げます?』『五錢——』などと云ひ合つて、幸子は、信太郎から細かく切つたカ  
 ステラを買つては、直ぐ口の中に入れ、又すぐに五錢、三錢と買つては口に入れて仕舞ふ、『そんなに  
 買つてばかり居ちやイヤ!』などと信太郎はちれて、幸子に本當の客らしい心持で買ひに來いと要求  
 するが、喰べるのが目的の幸子は、少し、信太郎の希望を充すやうな言葉を出さない。たま〜呼吸  
 がうまく合ふと、信太郎は、極めてマセた、番頭と云ふ風な對話を幸子にしかける。

おしゆん (隣家の妻君が腰をかけるのを見て)妾、どうも近頃家が變だと思つてるんですよ奥さん。



隣家の妻君 怎してで御座います

おしゆん 新橋邊に、いゝのが出来たんでせう！ (と、眼をうるませながら、口元では冷かに笑つて) 然し何も妾それを焼いてるんぢやありません、する事さへして呉れりあ、そりあ男の働きですから何を爲ようと勝手にですけど、子供の病氣なんぞの時は、餘計心細くなりますからね。隣家の妻君 けど、そんな事ぢやありませんまい

おしゆん いゝえ！ (と力強く押へて、眼をつり上げながら) 妾、ちやんとさう睨んでるんですよ (間) 先達中から来ても、そはくばかりしてゐるんで變だ變だとは思つてたんですけど、そんな筈はないと信じてたんですよ。ところが！

此の時、臺所で『あれッ！ よして下さい。よして下さい。奥様——』と女中が云ふ。見ると、硬質陶器の行商人が、皿小鉢の類を、だまつて臺所の板の間になげつけて居る。女中は、それに驚いて座敷に逃げ出して来ると、行商人は、笑ひながら、庭の方へ来て、硬質陶器の廣告を云ひながら同じく庭へ皿を投げつけて見せる。

驚いた三人と子供二人は、やうく／＼に氣狂の仕業しわざでないと云ふ事が分つたので、一齊にふき出すやうに笑ふ。

おしゆん だし扱で驚くぢやないか

つぎや 妾、全く氣狂がまるつたのかと存じましたよ (と笑つて) こわれたら大變ぢやありませんか

行商人 所が、どんな事をして、毀れませんが、此の焼ものの特徴で、いろく／＼模様の變つたのも御座います、奥様一枚いかゞです

信太郎 何だい？

行商人 へい、御皿で——坊ちゃん、如何です一枚？ (と皿を見せる。)

おしゆん いくらなの？

行商人 いろく／＼御座います (と、肩から荷を下ろして皿を見せる) 此の方で御座いますと、十錢、こちらが十二錢で、へい

おしゆん (皿を見て) 赤の這らないのは無いの？

行商人 皆その、模様はハイカラ式になつとりますので——勿論御好き好きでは御座いますが、當今はその、ハイカラ式が皆御望で御座います——

おしゆん (つぎやを見て) 買はうかね



隣家の妻君 妾も一枚貰ひませう

行商人 へい、どうも有難う存じます

おしゆん ぢや 家で三枚貰ひませう。(隣家の妻君を見て) 奥さんは——?

隣家の妻君 二枚——

行商人 へい(と荷物の中から皿を出して、前掛で拭きながら) 模様は——?

おしゆん 御見せ! (と皿を二三枚取つて) 信ちやん、どれがいゝだらう?

信太郎 (皿を大人らしく調べて) 此の、バラはくどいなア

行商人 へゝ、坊ちやん、なかゝ御見立が御上手ですなア——では、莖は如何様で?

信太郎 (他の皿を取つて) 母さん、竹が一番あつさりしてるね——

おしゆん (うれしそうに) さう? ぢやあ竹のにしよう(と竹の模様の皿を見せて) これを三枚——

いゝのを選つとくれよ

行商人 へいゝゝ! (と皿を、はぢいて見て三枚そろへる。) あなた様は?

隣家の妻君 バラにませう

行商人 此の方も、ちよつと變つてゝ面白う御座います、へい!

信太郎 バラは御止しなさいよ小母さん

隣家の妻君 さうですか——ぢやあ莖にませう

行商人 スミレ? 此の方もよく出ます! へい!

此の間に、おしゆんは、金を出して拂ふ。

隣家の妻君 奥さん済みませんが、只今持つてまゐりますから——

おしゆん へいゝゝ御安い御用——ぢや五十錢だね皆で?

行商人 へい五十六錢。

おしゆん え? 怎して?

行商人 竹の方は十三錢の口で御座いますから——

信太郎 五十錢に御負けよ!

行商人 坊ちやん、どう致しまして、それぢやあ、元が切れます(と金を受取つて) どうも有難う

——(と荷を片づけて) 又どうぞ

行商人は、幾度も挨拶をして歸つて行く。

皿を買つた、二人の女は、各自に自分の選んだ皿を眺めて居る。



つぎや 面白い商人で御座いますね

おしゆん 上手だよ賣り方が——もう御前此所ばかりで五十錢の商をしてつたもの  
つぎや 左様で御座いますね

幸子 母さん、ねむい——

おしゆん もう睡いかい？——ぢや御寢なさい

つぎや 御床延べませうか

おしゆん あゝ、そして、蚊えぶしを焚いとくれ

つぎや はい

女中は、命ぜらるゝまゝに働く。焼きもの、火鉢のやうなものに、蚊いぶしをくべて縁側に置くと、白い煙は軒端に立ちまよふ。夏のたそがれ時の氣分が、遣ひ込むやうに、舞臺の上に漂つて來る。幸子は、信太郎の隣の床の中にならぬ。

おしゆん さあ、もう信ちやん御藥の時間だよ（と枕元の水藥の瓶を取らうとするのを、信太郎拂ひのけて、「僕一人で飲む、うるさいッ！」と青筋を立てゝ怒る。おしゆんも青くなつて）親をぶつとは何ですか。不孝もの！——こんなに思つてやるのも知らないで——

おしゆんが氣狂のやうになつたので、信太郎は、恐れを爲して、だまつてふるえて居る。隣家の妻君も手持無沙汰で、ぼんやりして居る。

隣家の妻君（やゝしばらくして取つてつけたやうに）でも、もう本當にすつかり御なほりになつたやうですね

おしゆん（けろりとして、何事も忘れたやうに）御蔭様で——一時は、もうとても駄目だと思ひましたよ

隣家の妻君（談の緒口を見出したので調子づいて）妾もね——（問）何しろ、ほんとに弱つてらしたから……盛りに御悪い時分にや、酷御座んしたね——奥様

おしゆん 骨と皮でしたよ。何しろあなた、醫者が首をかしけたんですもの。もしもの事でも有つたら妾も一所に死んで仕舞はうと思ひましたよ。何しろ此子一人が妾の便りなんですから、此の子にもしもの事があれば、もう生きてたつて、何にも望の無い體ですから——

隣家の妻君 そんな事も——

おしゆん（強く否定して）いゝえ！ 妾が此の世の中に生きてるのは、奥さん全く信太郎一人居る爲なんです。此の子が居なかつたら、妾は遂に死んでます。又此子だつて、妾が居なかつ



たら、今迄は生きちや居やしません。そりあ、何邊も何邊も大病おほわざらひつて大病おほわざらひをしたんですか  
らね。肺炎はやる、チフテリアはやる、(と眼を光らして)一度は猖紅熱! 此の時なんざあ、  
妾は一週間も何にも喰へずに看病しました。けど、此度のやうなのは初めてとしたよ。(と聲を  
ひそめて) 何しろ、醫者が、小倉こくらさんでなかつたら、避病院にやられるんですからね  
隣家の妻君 左様でしたか?

おしゆん (口を垂めて) え、え! 大腸カタルの烈しいので、時候が時候ですからね。(間)でも、  
小倉さんが、一人でガ、張つて呉れたもんですから——もしも避病院なんぞにやられたら、そ  
れこそ、行き度くつたつて行かれませんか——まあ、ほんとに運がよつたんですわね  
隣家の妻君 (少し氣味の悪いと云ふ表情で) ほんとに! (と云つて、つ、つと唾つばを吐く)

おしゆん これでもう厄落しです! 此の上は、御父さんに云つて、籍さへ直ほしてもらへば、妾  
は死んでも思ひ残す事はありません——いつ迄も私生兒ぢやあ、出世の邪魔になりますからね  
隣家の妻君 (度々きかされてるので、又かと云ふやうな表情で) そんな事も、ありますまいけど——(と、  
信太郎がききはすまいかと氣をかねる)

おしゆん (心配するなと云ふ表情をして) もう知つてますよちやんと! 何も彼も分る子ですから

ね。此の子も、その事ぢや、子供心にどんなに案じてるか知れやしません。その爲にや、學校  
でも氣がねをする。御父さんには、充分うちとけられない——可愛想ですよほんとに! (間)  
それでもね奥さん、い、鹽梅えんばいに、先達、此の子の財産だけは貰つたんですよ、五千圓!

隣家の妻君 五千圓!? (間) 御幸福ごさいふですわね

女中が、奥から出て来て、「小倉先生が入らつしやいました」と云ふ後うしろから、洋服を着た醫者小倉が、  
ニコ／＼しながら這入つて来る。

おしゆん あら、先生——

小倉 イヤ、大分涼しくなりましたね。今日は、もつと早く来る所でしたが、急に少し用事が出  
来て

おしゆん 恐入りました! (と挨拶する。)

隣家の妻君 ぢや又後程——(と立ち上つて) ぢや拜借して行きますよ

と、夕顔の鉢を持つて行く。

小倉 怎です? (と座る。信太郎が、床の上に座り直さうとするのを見て) 寢て御居で、そのまゝで  
いゝ! (とやさしく押へて) 頭を使つちやいけない! 病人は、ぢつとして居なくつちやいけ



ない（悠云ひながら、極めて簡単に診察して）もう大丈夫だね。よかつたよかつた  
おしゆん 信ちやん御禮を仰有い！ 全く先生の御蔭で直つたんだよ！

小倉 そんな事はない！（信太郎に）運がよかつたんだね

おしゆん いゝえ。此度の病氣は、全く先生の御力一ツで、主人も、どんなにかよろこんで居りますけど、遂かけ違つてまだ御禮も申上げられないんで――

小倉 いゝや、それには及びませんよ。病氣を癒すのは醫者の役ですから――然しよくなほりましたよ！（間）此分なら、もう心配もありますまいが、呉々も喰べ物文は注意して下さい。喰べものでやりそこなふと、此度は駄目ですからね

おしゆん 伺つたかい？ 喰物が大切なんですよ！

信太郎 えゝ！

おしゆん そして早く癒つて勉強しないぢや、もう學校が始まるからね

小倉 學校は何時からです？

信太郎 九月の一日から――

小倉 とても行かれないなア

おしゆん 左様でせうか

小倉 勿論ですよ。（間）學校なんざいくら休んだつて何でもない。體が第一なんだから。それに、

此子は、あんまり學問を急がん方がいゝでせう。普通から云ふと、頭が餘程働き過ぎる方だから――子供の早熟したのは、一番案じられますよ。此の時分は、只もう悪戯ばかりしてるのが一番いゝんだ。（此の談の中に、女中が持つて來た手洗で手を洗つて）ぢあ一ツ、今日から御魚を許さうかね

おしゆん もう御魚を喰いてもよろしいんですか？

小倉 極く軽い、脂肪の無いものですよ。小あぢなんざあいゝでせう。それに此頃は新らしいか

ら――

おしゆん 信ちやん伺つたかい？ 先生から、御魚の御許しが出ましたよ。うれしいだらう（とほくほくする。）

信太郎 何とも云はずに、御膳の時につけて呉れる方が僕は猶うれしかつたなア

おしゆん 何だつて？（とにつこりして）だしぬけに上げる方がいゝのかい？（間）先生、あんな

マセた事を申しますよ（と、會心の笑をもらす。）



信太郎 僕は何でもさうだ！ だから、此間の財産よりも、御父さんが黙つて下すつた時計の方が餘程うれしかつた

小倉 (信太郎の頭を叩いて) まあ、そんな事は、考へない方がいゝ。子供は、子供らしく——何にも、心配しちやいけないよ。心配は大人のするものなんだから——(と立ち上つて)では又——

おしゆん どうも恐入りました！

小倉 御大切に——(信太郎に) 喰べものが大切だよ

おしゆん はいと仰有い！

信太郎 はい！ (と小さな頭を下げる)

おしゆん 分つたね？

信太郎 えゝ！

おしゆんは、小倉を送つて出て行く。信太郎は、又床に横はる。

おしゆん (大急ぎで座敷にひきかへしながら) さあさあ、御魚を上げるよ。をいしく煮てね。(間)つぎや、魚屋へ行つてね、小あぢの新らしいのがあつたら取つといで！ 坊ちゃんに上げるんだ

から、大急ぎで——

つぎや はい——

と答へて、臺所から驅け出して行く。

四方が、やうくうす暗くなりはじめる。

表口の方から、敏郎が静かに這入つて入る。

おしゆん をや？ 御父さんが——(と簡単に挨拶して) 一歩ちがひで、今小倉先生がおかへりになつた所ですのに——

敏郎 (座つて) 今、そこで會つた

おしゆん 御會ひんなつたんですか。そりあよかつた。よく御禮を云つて下すつたでせうね？

敏郎 云うたよ

おしゆん それで——？

敏郎 何が——？

おしゆん 何か御談しなすつて？

敏郎 いゝや別に何も談云ふ程の談も無かつた。向ふが車で走つて來たのやさかい、さう長々と



道で談も出来んよつてなア

おしゆん (物足らぬやうに) さうでしたか

敏郎 (信太郎に) 信太、大層よくなつたなア、え、鹽梅やつたなアほんまに!

おしゆん もう大丈夫ださうですよ。何しろ、御魚の御許しが出たんですから

敏郎 (うれしそうに) さうか、そりあえ、直ぐに取つて遣つたらどうや

おしゆん もう云つてやりましたよ。(しばらく間を置いて) 御忙しかつたんですか

敏郎 (平気で) うん! 相かはらずな。それに出張せんならん事もあつたりして――

おしゆん 新橋の方へですか?

敏郎 (笑つて) 何云ふてんのや、(間) そんな身分に成り度いもんや

おしゆん うまい事仰有つて、もうちやんと解つてるんですよ。何にも知るまいと思つたつて、

山田さんにききましたからね――

敏郎 あほらしい! 山田が何ぬかしたかて、まあ考へても見い、一體そんな暇があるか無いか

おしゆん そんなら、家へ来て下すつたつていゝぢやありませんか。信太郎は死ぬか生きるかの

大病なんですからね。もしもの事でも有つて御覽なさい。女一人でやきもきばかりして、そ

の上叱られるなア妾なんですからね――

敏郎 ハ、(と事も無げに笑つて) まあえゝやないか。久しぶりで来たのやし、それに今日は、

先達の貯金なア、あの通帳を持つて喜ばしに來たのやから、さうガミノ云はんとおけ!(や  
や眞面目になつて) 御前の心もよう分つとるのやけど、いろく事情もあつて、來たうにも來

られん場合もあるもんや(と、懐から銀行の通帳を出して見せて) これ見い。かうしといたら御前  
も安心やろ

おしゆん (通帳を見て、思はず涙ぐんで) ありがたう御座いました!(再びながめ入つて) え、え、

これでもう安心しました!(信太郎に向つて) 信ちやん御覽! 御父さんがね、御前の爲に、

澤山御金を下すつたんですよ(通帳を見せて) これッ! こんなにだよ! 御禮を仰有い!

信太郎は、だまつて頭を下げる。

敏郎 もつとくやり度いのやけどな、御父さん貧乏やさかい、後は御前が早う豪うなつて、その

倍も倍もの御金を儲けたらえ。さうして、此度は此の御父さんに御前が御小遣を呉れるんやぞ

おしゆん (しみくと) 早くさう成つてお呉れよ。(間) 御前が大人になる時分にやあ、母さんも、

もう心配がなくなるだらうし(と考へて) ではね、こんなにして載いて、又云ふつてなア、あ



んまり厚顔しいやうですけど——

敏郎 籍の事か？

おしゆん 若い中は、何も彼も構はずに、只目先の事ばかりあせつて、それが叶へば他の事は何でもいゝと思つてましたけど、段々年を取つて、子供が大きくなつて行くと、さうも云つて居られませんしね

敏郎 そら、さうや！

おしゆん ほんとに今はもう、自分の慾や何かより、子供の事が一番氣になりますからね——  
女中のつぎやが、小あぢを買つてかへつて来る。

つぎや (敏郎に) 入らつしやいまし (と挨拶して) 奥様、これで宜しう御座いませうか？

おしゆん 御見せ！ (と小あぢを見て) あゝいゝよ。こりあ新らしい。臺所へ置いといてくれ直ぐ行くから

つぎやは、魚を臺所に持つて行つて、鍋の中に入れる。

信太郎 早く煮て—— (と甘えるやうに云ふ)

おしゆん 『煮て——』とは何ですか。煮て下さいでせう

信太郎 ア、マ、煮て下さい

敏郎 よしく、今すぐ煮て上げるぞ (おしゆんに) 早う煮てやれ。(間) それから、少し調べものがあるさかい、二階に行くから——

おしゆん あゝさう (とうなづいて、臺所に行き、つぎやに) ぢや御前茶の間の火鉢に御粥をかけとくれ。それからね、濟んだら御二階へ行つて、旦那様の御机や何かを見て御出で、よごれてやしないか——それと御煙草盆——

つぎや はい

女中は、命ぜられた用事をする。おしゆんは、臺所で魚を煮る。その間信太郎と敏郎とは話をする。

その話の間におしゆんは時々口を出す。

二階を片づけて来たつぎやは、ニコ／＼しながら、信太郎の床の側に座る。

敏郎 信太、すつかり快うなつたら、海岸へ行くか御母さん？

おしゆん (臺所で魚を煮ながら) その子にや温泉がいゝでせう

敏郎 さうか。ほんなら温泉に行け——

おしゆん (臺所で) それより、御床上げの御祝をしないぢやあ、皆呼んで——



敏郎 何でもせい！（ニコ／＼して）ほんまに命びろひをしよつたんやからな（つぎやを見て）御前もえらい御苦勞やつたな

つぎや いゝえ、行き届きませんで——でも本常に御目出度う御座いましたねー坊ちやま

おしゆん（臺所で）神様の御助けだよ！（間）信太郎には、いゝにつけ悪いにつけ、神様がいつてらつしやるんだからね

敏郎 さうやさうや！（笑つて）母さんに云はしたら何でも神さんや

おしゆん（臺所で）そんな風に仰有るけど、本當ですよ

敏郎 誰れもうそやと云やへんで——なアおしゆん、私にもうんと金の儲かるやうに神様に祈つて貰ひ度いもんやな

おしゆん（臺所で）あなたは、浮氣だから、神様だつて背いて下さりませんわ

敏郎（笑つて）ホー私が浮氣やと——つぎや、私は浮氣か？

つぎや（笑つて）さあ、いかゞで御座いますか

敏郎 私程かたいもんは、あらへんで世の中に——（と云ひながら、つぎやの肉づきの好い膝のあたりを擦ぐるやうな事をする。）

つぎや（小聲で）旦那様（と制す）

臺所のおしゆんは、魚を煮上げる。敏郎は猶つぎやにからかふ。

その間信太郎は、眼を据えて、ぢつと二人の様子を見て居る。

しばらくして、おしゆんが臺所から出て来る。

敏郎（おしゆんを見て）さッ、一ツ——（と立ち上つて、二階に行く）

おしゆん つぎやもそこに居たのかい

つぎや はい

おしゆん ぢや少し、坊ちやんを頼むよ

つぎや はい

おしゆんは、鳥渡着物の着こなしを直して、敏郎の後から二階に行く。

あたりが、段々と暗くなる。つぎやは、岐阜提灯に火を點けて椽につるす。その間に、信太郎は横になつて、うと／＼する。つぎやは、それを見て、忍び足に座敷を去る。

しばらくの間沈黙が／＼。

やがて、信太郎は起き上つて、床の上に座つて、四方を見、誰れも居ないと見るや、急に立ち上つ



て座敷の中を歩み始めて、一層竊かに臺所に出て、魚を煮た鍋の側にしやがむ。

かくする事しばらくして、やがて鍋の蓋を取つて香を嗅ぎ、又蓋をして、座敷にかへらうとするが、病後の食慾は遂に何物にも打ち克つて、信太郎は、鍋の中の魚をつまんで、犬のやうにむさぼり喰ふ。此のトタンに、二階からおしゆんが下りて来て、「ほんとは、せはしない人——」とうるんだ聲で云ひながら座敷に来て、信太郎の居ないのに驚き、方々たずねて、やがて臺所に魚をむさぼつて居る信太郎を見出すと、「コレッ」と云ひ様、思ひきり、信太郎の手をなぐる。

信太郎 母さん御免なさい！ (と、狂氣のやうに叫ぶ。)

おしゆん 何をするんだ (と云ひながら、信太郎を座敷迄、ひきずつて来て、床の上につき飛ばし) 何をした！ (と怒鳴る。)

信太郎 (齒ざしりをして口惜しがりながら) 母さん、僕が悪い、僕がわるい、どうぞかんにんして下さい。ああ僕がわるい！ (と泣き倒れる。)

おしゆん 信太郎、御前は何と云ふ卑しい子なんだ。ちやあんと御飯の時に上げようと思つて居るのに、それ迄待てないで盗むなんて (ロステリーの發作が段々とこみ上げるやうに) 畜生！ 乞食！ どのほう？ あー御父さん此の子はドロボウです。信太郎はドロボウです！

信太郎 (氣狂のやうに泣いて) 母さん、僕がわるいのですから勘忍して下さい。僕が悪いんですから (とおしゆんに縋りつく)

おしゆん 知らない、知らない、もう母さんはドロボウの子はイヤだ！ 乞食の子はイヤだ！

餓鬼！ 餓鬼！ あーイヤだイヤだ！ (と狂ひさげぶ)

此のさわざに、睡つて居た幸子は、起きて火のつくやうに泣く。つぎや、敏郎も出て来て、各々手を出しやうも無いと云ふ風に立つて見て居る。敏郎は之の間に、電氣を點ける。つぎやは、幸子を粗で背負つて仕舞ふ。

おしゆん 先刻先生が何と仰有つた。此の上喰べもので失敗つたら死んで仕舞ふつて仰有つたぢやないか。折角癒つた病氣をぶり返へすんだ！ もう駄目だ！ 駄目だ！ 駄目だ！ (と信太郎をこづき乍ら泣く)

信太郎 僕は死ぬのはイヤです。母さん、僕が悪いから助けて下さい！ 怎うぞ助けて下さい！ (と身悶える。)

おしゆん 死ぬのがイヤなら何故盗んだ！ 盗んで喰べたからもう駄目です。御前は死ぬんだ！ 信太郎 助けて下さい！ 僕は、少ししか喰べないんです！ 母さん、少ししか喰べやしません



おしゆん (頭を烈しく左右に振つて) 少しでも、盗んだから駄目だ! 駄目です! 駄目です!  
えええ、もう死ぬんだ! そら死ぬ! そら死ぬ!

信太郎 あー、怎したらい、でせう (と父の所へ走り寄つて) 御父さん! 御父さん、助けて下さい!  
い! (と縋る。)

敏郎 (涙ぐんで抱きよせながら) を、を、助けてやるぞ、助けてやるぞ! もう盗んでは不可んど、大丈夫や、助かる、助かる! 御父さんが助けてやる!

おしゆん 駄目だ、駄目だ! 御父さんだつて駄目だ!

敏郎 (おしゆんの側へ来て) まあ静かにせんか。子供が可哀想やないか、どうで喰べさす魚や——  
おしゆん いええ、盗んでなんぞ喰べては死にます、もう怎しても駄目です!

敏郎 ほんなら、怎したらええの

おしゆん 信太郎が死ぬんです! あーあ、もうあの子が死ぬんです!

信太郎 (母に縋つて) 助けて下さい! あー、神様助けて下さい!

おしゆん 神様に願つてももう駄目だ! もう駄目だ! 御前は死んで仕舞ふんだ! 喰べたから死ぬんだア——(と泣く)

信太郎 (立ち上つて、ぢたばたしながら) あー大變だ! 大變だ! 僕は死ぬ——あー、僕は何て卑しいんだらう、あー僕は何處かへ逃げてく——(と縁側に出て、地團太を踏む)

おしゆん 逃けても駄目です! どこへ隠れても神様は知つてらつしやるんです。御前はもう怎しても死ぬんだ!

信太郎 (叫び泣いた揚句 僕は死んで仕舞ふ——)

おしゆん 御死に! 御死に! 母さんは知らないから、死んで御仕舞ひ!

信太郎 死んで仕舞ふ

と云ひ横庭に下りて走り出す。

敏郎 信太郎、何處へ行く——つぎや、後から行け!

つぎやは、信太郎の後を追ひかけて出て行く。信太郎は、隣家の垣根の奥にかくれる。

しばらくして、垣根の奥にて『大變です! 坊ちやまが井戸へ——』とつぎやの聲がする。敏郎は驚いて飛んで行く。後からおしゆんも走り出る。近隣の人々の集る足音、叫び聲、物音、などが、恐ろしくきこえる。

やゝしばらくして、近所の男女にかつがれて、氣絶した信太郎の體が、座敷の中に運ばれる。その後



から氣を失つたやうなおしゆんも運ばれる。急に頼んで来た近所の醫者は、一心に信太郎の蘇生を計る。人々は、熱心に見つめる。やがて、醫者は、已に絶望だと云ふ事を、無言の中に皆に知らせる。近隣の人々は、やゝしばらくの沈黙の後、座敷に上つて、信太郎の死骸を正面に直ほし、無言の中に顔に白い布をかける。

敏郎 (涙ながらに) おしゆん! 信太は、もう死んで仕舞ふたよ! 今日迄、御前を苦しめた信太は冷たくなつて仕舞ふたよ! (鼻をすより上げて) 見てやれ! 御前が此の子の爲に死ななければ、怎うで此の子は御前に殺される子や!

おしゆん (ふらくと身を起して) あゝ、此の子は、死んで迄私を苦しめるんです! 此の子は私を殺すんです。此の子が死んだら、もう生きちや居られません! 此の子は人殺しです。信太郎が私を殺すんです!

敏郎 いや、此の子は、御前に殺されたんや!

おしゆん いや、え、此の子は私を殺すんです! 人殺です! 人殺です!

おしゆんが、又氣狂のやうになりかけるので、敏郎初め近隣の人は無理におしゆんを二階に、かつぎ上げて寝かして仕舞ふ。その間に、手のついた人々は、佛壇からいろ／＼の品を下ろして、信太郎の

死骸の前に飾る。いつか、死骸の前には蠟燭の火がまたゝき、線香の煙が棚びく。皆々は静かに二階より下りて、信太郎の死骸の前に圓く座る。

家中の電氣が、人々の手によつて點ぜられる。隣家の妻君は、臺所の鍋から小魚を皿に入れて、信太郎の前に捧げ合掌する。

敏郎 (隣家の妻君に) いろ／＼御世話様になりました。——信太郎は、とう／＼こないになつて

仕舞ひました (とはらくと涙を落す)

近所の人々は誰れ云ふとなく、云ひ合はしたやうに、一人去り二人去り、若い美しい娘二人を残して皆去る。

隣家の妻君 先刻迄あんなにしてらしつて、(間) 喜んでましたんですけど

敏郎 いや、何も彼も云ふて下さるな、因果やと思ふとります! あれに育たせたら恚なるのは知れています

隣家の妻君 さぞねー奥さんが後で御力落しで御座いませうよ。妾、それを思ふと何ですか案じられましたね——

敏郎 いや、あれは正氣やをまへん! (間) こないな場合にも、正氣で捌いて行かんらん私は、



實際身を切られるやうに辛らうをます！（と膝をつかんで泣く）

しばらく沈黙とすゝり泣きとが續く。

敏郎（信太郎の死體にすり寄つて、顔の布を取つて、ぢつと見ながら）信太郎、信太郎！ どうぞ勘忍して呉れ！ 御父さんが悪いのやから許いとくれ！（間）あーあ、御父さん所で育てんのが悪かつた！それが御前の不運や！（間）許いとくれ！

慙う云ひながら、敏郎は、突伏して、わな／＼と泣く。

醫者の小倉が、おはたどしく庭から這入つて来て、つか／＼と座敷に上り、信太郎の死骸にさわつて見て、しばらく考へて後、死骸の前に、平伏して禮拜する。やがて、首を上げ、再び死骸を見つめ、線香を立て、小き鐘をニツ三ツ叩く。

押しつけるやうな沈黙の中に、鐘の音のみり／＼と響く。

近所の娘等、隣家の妻君、皆首を垂れて泣く。

縁側の々顔の花、何時の間にか皆一様に白き花瓣を開く。丁度信太郎の靈のやうに――。

流れの女 一幕



場所 お蓮の家  
時 秋風の吹く宵の事

中洲の素人家の二階に圍はれて居たお蓮は、旦那の都合で、青山原宿の新開地へ獨り住む事になった。家は新築の三間で、墓地の跡に建てられたので、窓を開けて見ると、日の沈む西の空地の片隅に、片付残つた無縁の石塔や墓石が、冷たく積み重ねられて居る。

お蓮は此所へ移つてから三日目になる。初めて近所の銭湯へ行つて今歸つて来て、長火鉢の所で、ぼんやりしてゐる。

上手の臺所口の方で『れんちゃん——』と云ふ年寄の聲がする。

お蓮 伯母さん——？。

年寄の聲 あ、(六十先の、人の好き、うな老婆が遣入つて来て) 先刻は何處へ行つてたの？ 洋燈も

點けないで——？

お蓮 お湯へ行つてたの——伯母さん此所等のお湯安いのね——

伯母 あゝ、下町たみ違ふさ、怎で新開地なんだもの——けど開つ放しで外へ出たりなんぞしな

い方がいゝよ。物騒なんだからね此頃——そらお米が高いから。

お蓮 お米が高いと泥棒が殖えるのかしらん？。

伯母 そうさアね、だつて喰べられないもの。蓮ちゃんも是からは、お米の苦勞も爲するやうになるんだね。

お蓮 イヤよ伯母さん！ 妾お米の値なんぞ知らないわ。その方がいゝんですよ伯母さん——。

伯母 どうして？ そんな事があるもんかあね、人間何時迄空に暮してられるもんですか——そんな事ア何だけど、氣をお付けよ昨夜も近附へ這入つたんだつてさア。

お蓮 そを？ 大丈夫よ！ けどイヤだわね——、でも妾一人で居る夜中んでも這入られるよ、空巢覗の方が恐く無つていゝわ。

伯母 そりや左様さね。

お蓮 もし泥棒が來たら、妾伯母さん所へ逃げてくわ、よくつて？ すりや伯父さんも居るし大文夫だから——てばね、妾嬉しいんですよ、此所へ移して來てから何年にも會はない伯母さんにも毎日會へるし——妾ね——、昨日も、近所を獨りで歩いて見て、種々と昔しの事を考へて見たんですよ。随分變つてね——此處は。



伯母 そりやお前、もう四年——そうく、お前が伯母さん所に居た時から見れば、もう六年にも成るんだもの。

お蓮 左様ねえ、六年に成るわねえ、丁度妾が十八の時だつたから——あの時分は全然田舎だつたわねえ(間)丁度今頃——冷たい風の吹く時分になると、あの小さな川の向ふで笛の音がして来たり——庭へ螢が飛んで来たり——そら、よく提灯を灯けて人形芝居なんかの夜席へなんぞ行つたぢやありませんか。

伯母 そうだつけね——大通りの——。

お蓮 え、——今でも有つてあの夜席？。

伯母 とうにつぶれたよ。

お蓮 そうですね——けど考へると、あの時分の方が好わ妾——伯母さんなんかも左様か知ら、妾ねえ、昔の事を考へ出すと、そりやほんとに堪らなく成るんですよ。

伯母 何がさ？。

お蓮 え、何だか恚嬉しいやうな、情けないやうなねえ、妾自分にも分らないんだけど、變にお腹の中が冷たくなつて、胸がこみ上げて来るやうな気がするんですよ——で昨日の事が、もう

怎しても捕へられない遠くへ行つたやうな気がしたり、子供の時分の事が遂二三日前の事やうに思はれたりするんですよ——時の經つてえ事はイヤだわねえ伯母さん。

伯母 段々死ぬ目が近くなるんだもの誰だつてイヤさ。

お蓮 妾や死ぬつて事は、あんまり恐くはないんだけど——別れるつて事が一番イヤだわ、だから怎麼、イヤな所でもねえ、其處を移して仕舞ふとなると、妾何時でも泣いて別れて来るんですよ！ 昨夜なんども、あの狭い中洲の二階の事を考へて、獨で何時迄も泣いてたの、あんなイヤな家つちや無かつたけど——。

伯母 けどお前、今は恚して、立派な家に獨りで居られる身分に成つたんだから何の位仕合せだか分らないさ。

お蓮 え、——妾や中洲へ歸り度いつて云ふんぢや無いのよ。唯思ひ出すんですよ——妾ねえ、そら名所やなんかに行くでしよう。すると、御堂だの石垣だのに、何時の何日、誰々なんてよく名が書いてあるでしよう。

伯母 あ、。

お蓮 あれはきつと又來た時に昔の事を思ひ出さうとしていしようよねえ、それが、あ、して方



々へ行つて書き付けて居る中に、月日はどん／＼経つちまつて、二度と同じ所へ行けずに皆死んぢまふんでしよう。そんな事思ふと儚なくつて——あ、妾明日あたり中洲へ行つて見やうかしら。

伯母 何だつて？

お蓮 え？ 先一昨日迄居た、あの二階の近所を、からかい面に歩いて見てやらうかと思ふのよ

——悦ちやんの阿母さんにも會いたいし、彼所の物干へ朝顔を忘れても來たし。

伯母 朝顔つて、何なんだね？

お蓮 そりやいゝわ、悦ちやんに持て来てくれつて葉書を出してやつたんだから——悦ちやんでねえ、そりや可愛らしい子なんですよ伯母さん。

伯母 へえー。

お蓮 年はまだ十四だけど、苦勞した子でねえ、可哀想に字が讀めないんでしょ、學校へ行かないから、だもんだから近所で遊び手が無いのよ——歌の上手な子供でねえ。

伯母 それつてば、蓮ちゃん、晩の御飯は濟んだのかい？

お蓮 いゝえまだ。

伯母 ちや好かつた！ 妾あの茄子を煮て来てあげたんだよ。

お蓮 茄子？

伯母 あゝ、秋茄子でをいしいから。

お蓮 ハゝ、妾茄子大嫌いよ。

伯母 へー、茄子が嫌いなのかい。

お蓮 えゝ、種がぶつ／＼しててるでしょ、妾何でも、あのブツ／＼つてものが震える程嫌いなんですよ。

伯母 そりや不可かつたねえ。

お蓮 えゝ折角だけど、伯母さん知つてるぢやありませんか、そら、妾が伯母さん所に居た時分、漆にかぶれて、顔中ブ／＼／＼が出来たのが、イヤで々々々死んじまはふとした事が有つたぢや無いの、そら栗のなる時分に——。

伯母 あゝ、そんな事が有つたつけねー。そを／＼あれから蓮ちゃんは、居なくなつたんだつちねー。

お蓮 えゝ——寒い方へ行つちまつたんだわ。



伯母 そうだねー(間) あの時分は、銀杏返に結つて、藥玉の簪を挿してた蓮ちやんだつた——  
けど若いよ、何時も。

お蓮 苦勞がありませんもの——。

伯母 苦勞の無いのは何よりさ、一生苦勞なしで死ぬる人はまあ、此の位仕合な事は無いさ。

下手の格子戸が開く、太い男の聲で『あゝ、重い々々』と云つて、何かづしんと置く音がする。

お蓮と伯母さんとは、小さな聲で話を爲る。お蓮の旦那が来たのだ。やがて三十二三の外套を

着た男が、蓄音器の包を持って這入つて来る。

お蓮 入つしやいまし。

旦那 あゝ、あア重い。

お蓮 何なの鳥渡?

旦那 蓄音器だよ。

お蓮 重かつたでしよ。

旦那 腕が折れ相に成つちやつた。

伯母 蓮ちやん——あの妾——。

お蓮 あゝ、まだ左様ね、あの貴郎、妾の伯母さんなんですけど。

伯母 初めまして、蓮ちやんが、イロ／＼と御世話様になりました。

旦那 イヤ何——此の近所?

お蓮 えゝ、直ぐ其所なの、もう六年もまるで會はずに居たんですけど、ずつと昔も、妾いろいろと伯母さんに御世話になつた事があるんですよ。

旦那 そうか! そりや御互に好都合だね、何かと又女世帯ですから、宜く願いますよ。

伯母 はい——元から我儘な方でムいますから御氣に召しませんでムいませうけど、心の中は極いゝ兒でムいますしそれに両親とも無い全くの孤子なんでムいますから、どうぞ宜く妾から御願ひ致しますから。

旦那 イヤ何——私こそ——。

伯母 蓮ちやん。

お蓮 え?

伯母 ようく妾から御願ひはするけれど、お前さんも旦那様を大切に——。

お蓮 そんな事分つてゝよ伯母さん。



伯母 そうかい、ぢや妾又來ますから。

お蓮 あゝ左様——

伯母 別に用は無いかね？

お蓮 別に——

伯母 ぢや旦那様、御ゆるりと。

旦那 左様ですか——イヤ失敬しました。

お蓮 ぢや左様なら——あの、茄子は持つて歸つて頂戴よ。

伯母 あゝ。

伯母さんは上手の臺所口から靜に歸て行く——。

お蓮 やつぱり苦勞になるんですね、年寄だから——けど妾ほんとに嬉しくつて、妾にや親も同

然な伯母さんなんだから——（落音器を指して）やつて見ませうか？

旦那 まあ後にしろよ、怎で此所へ置いとくんだから。

お蓮 そを—— いゝわねえ。ねー、貴郎、妾ねッ、昨夜お宅の前迄行つて見たんですよ。だつ

て獨で居るとたまらなく淋しいんですもの——恐い所ねー。

旦那 己の家がかい？

お蓮 えい！ あの藪の所があるでしょ。

旦那 車止の細い横を曲つた所かい？

お蓮 えい、よくあんな恐い所に居られるわ、妾左様思つたわ。

旦那 馴れりや平氣だよ——然し獨でなんぞ彼處所へ來ない方がいゝよ。悪い奴でも居たら怎する。

お蓮 貴郎ん所へ逃げ込むわ。

旦那 冗談ぢや無いよ。ほんとに何だぜ、無暗と家なんぞへ來ちや不可いぜ。

お蓮 怎して？

旦那 イケないんだよ！

お蓮 いゝわ行つたつて——知れちや悪いんですかお家の方に？

旦那 そんな事ア無いけど——まあ止した方がいゝよ。

お蓮 そを——。

旦那 何を鬱ぐんだい？ 馬鹿！ まあ時節を待つて居る事さ、ねッ、で己を信じて居ればいゝ。



のさ。

お蓮 えい、信じてますわ妾、——けど時節を待てば怎なるんでしよう。

旦那 怎にか成るさ。

お蓮 妾、怎もならないんだつて可んですけどねー、妾ほんとに貴郎を思つてるんですから、何時迄も變つてさへ下さらなきや、外に望みはありませんわ。

旦那 そんな心配は入らないぢや無いか、初めから云つてる通さ——。

お蓮 えい。心配してるんぢや無いんですけど、種々と酷い目に會つて居るもんですから——。

旦那 をい。

お蓮 え？

旦那 手をお出し。

お蓮 恠ですか？ (お蓮が手を出すと、旦那は、袂から紅い石の遺入つた指輪を出して、薬指に嵌めてやる。) まああ!?

旦那 いしだらう？

お蓮 えい——何て石なんです？

旦那 ルビー——心が變ると、その石の色が變るんだ相だよ。

お蓮 ふーん！ (感心したやうに、夢のやうな心持で)

旦那 だからもう安心だらう。お前は己の體へ繩を付けて、その元を緊乎握つて居るやうなものだからなア。

お蓮 イヤですわ妾！ そんな事は、新派の芝居の臺詞みたいだわ。妾はねー貴郎の此所で、(男の胸に手をやつて) 思つて下されば、そんで死んでも可んですから——

旦那 そう云へば、お前もだぞ！ 今迄は怎でもだねー、浮氣で無く、何處迄も己の女房だと思つて、云ふ事を肯かなくつちや不可いよ。

お蓮 えい、えい！ 貴郎の事なら妾何でも爲るぢやありませんか——ちゃんと今日は丸髷まるむしに結つて居るでしよう。

旦那 うん！ それからねー、帯おびもきちんと締めないぢや不可ないよ。

お蓮 えい、今お湯に行つたもんですから。

旦那 今計りぢや無い何時でもさ。なるべくキチンとして、圍かこひ物だと云ふやうな風體は一切止めるんだぜ。



お蓮 えい——ぢや帯しませうか？

旦那 何も今直ぐ爲ないだつていよ——巳は鳥渡歸つて又直ぐ来るからね！。

お蓮 あゝそ——ぢや直き来て下さるんですね？

旦那 直ぐ来るとも。だからね、此度来たら女房らしく爲てるんだよ。

お蓮 えい好ござんす——ぢや妾是を行つてもいゝんですね。

旦那 いゝとも！ お前の好きな新内もあれば、義太夫もあるよ。

お蓮 ぢや御機嫌好う——

旦那 さよなら。

旦那は、玄關から歸つて行く。お蓮が、着音器の包みを解きたる頃、門口で『姉さん、此所で  
すか』と云ふ子供の聲がする。

お蓮 あゝ——悦ちやんだね？

外の聲 えゝ。

お蓮 お上り——（十四になる悦ちやんが、枯れた朝顔の鉢を持つて上つて来る。）まア、よく来て呉れたのね、はがきが着いて？

悦ちやん あゝ——酒屋から二ツ目の角だつてから曲つたら行き止りなんだもの。

お蓮 あらッ、ぢや何方から来たの？ 電車を下りて直ぐの坂を下りたんだらう？

悦ちやん うゝん！ ちつと先の坂を下りたの。

お蓮 ぢや後戻をして来たんだらう？ それ御覽な、だから不可いんだよ、直ぐの坂なら酒屋か

ら二ツ目さ——でも好く来て呉れたわねえ、姉さん待つてたんだよ。御母さんは達者？

悦ちやん 姉さん此所へ来たなア先一昨日ぢや無いか——。

お蓮 でもさ！ 妾もう何だが、一年も會はないやうな氣がするんだよ。界限の人が皆違ふし——

——それに悦ちやんの阿母さんにや、あんなに毎日會つて居て、いろく親切にして貰つてるか

ら——歸つたらよろしく云つとくれよ——ほんとに好く来て呉れたねえ、妾もう悦ちやん來ら

やあ呉れまいかと思つたよ。

悦ちやん 何故。

お蓮 何故つて——何だかそんな氣がしたの。

悦ちやん やあ、奥様になつちやつたんだなア姉さん——豪いなア。

お蓮 何がえらいもんか——てば持つて来て呉れた？ 朝顔。



悦ちやん あゝ。

お蓮 物干の隅に有たらうや。

悦ちやん うゝん！ もう棄てゝあつたのをねえ己が探がして來たんだよ。

お蓮 棄てゝ——？

悦ちやん あゝ——己驚いちやつた！ あのねえ姉さん、姉さんの居た二階ねえ、最早ふさがつてゐるんだせ。

お蓮 そうかい——此度怎麼人？

悦ちやん イヤな奴！ 眞白に白粉なんぞをつけやがつてねえ、元は『濱ぶた』なんだとさア。

お蓮 ほゝゝゝ、そんな事何時覺えたの悦ちやん？ 二三日會はない中に悦ちやんは生意氣にな

つたねえほんとに。

悦ちやん 生意氣ぢや無いけど——やつぱり何だねえ姉さん、あゝ云ふ二階は、始終姉さんのやうな人が居るやうに成つてゐるんだねえ。

お蓮 妾めかけかい——。

悦ちやん あゝ——さツ朝顔。

お蓮 ありがたう（考へ込んで居る）

悦ちやん （窓を開けて、暗い外を眺めて、）姉さん、此所は元、お墓だつたんだねえ。

お蓮 あゝ——怎して？

悦ちやん あんなに御墓の石があるもの——あの御石塔は誰んだらうなア。

お蓮 無縁の人の御石塔さ。

悦ちやん 無縁て？

お蓮 だれのだか分らないのさ。

悦ちやん 骨も分らないのかい？

お蓮 あゝ。

悦ちやん 可愛想だなア。

お蓮 可愛想さねえ——けど、妾も死ねば、きつと無縁の佛様になるんだらうよ。

悦ちやん 何して？

お蓮 誰れも、お花もお線香も上げて呉れる人が無いもの——。

悦ちやん 姉さんが死んだら己が花を上げてやらあ——けどイヤだなア。



お蓮 何がさ。

悦ちやん (火鉢の前へ座つて) ぢや此所を掘れば、人間の骨が出て来るぜ屹度。

お蓮 そうかも知れない。

悦ちやん きたねえなア。

お蓮 怎して? (と茶をのむ)

悦ちやん 怎してつて、そのお茶なんぞ、骨の水だぜ。

お蓮 あッ(と吐き出して) 冗談でしょ。是は水道ですからハ、ハ、ハ、(火鉢の縁を拭く) 悦ちやんお茶與らふか。

悦ちやん イヤだ! こんな枯れた朝顔を何するんだい姉さん?

お蓮 來年も咲かすのさ——姉さんはねえ、此朝顔は忘れる事が出来ななんだよ、怎しても。

悦ちやん 何故さ?

お蓮 矢島つてねえ、そりや親切な人があつてね、姉さんその方の奥様になる所だつただけけど、種々と都合が有つて思ふやうになれないんだらう、でその方と毎日會つちや泣いてただけけど、妾さいぢつと我慢すれば、その人の身も立つ事なんだから、妾はもう諦めませうつて云つたん

さ。するとねえその方も大變喜んで、お互に死ぬ迄兄弟で居て仲よく爲やうつて約束して、それから縁日歩くと、此花が有つたんだよ。此花を賣つてる人がねえ、もうよほしくしたお爺さんで、妾もう可愛想に成つたから皆買つて與つてね、毎日々々、赤が咲いたり白が咲いたりするのを見ちやあ、姉さん樂しみにしてたんだよ。その中に方々へ越したりなんか爲たもんだから、枯れたのもあるし、なくしたのもあるし、今ぢや是一ツきりに成つちまつたんだよ。

悦ちやん で矢島さんて人は怎したの。

お蓮 怎なすつたか——姉さん知らないの。

悦ちやん ぢや別れちやつたんだね、姉さんとは?

お蓮 いゝえ!

悦ちやん ぢや今の旦那が矢島さんなの?

お蓮 いゝえ! それはね——もうすつと昔の事なんだよ、まだ姉さんの阿母さんが生きてる時分の事なんだから。

悦ちやん 姉さん何處で生れたの?

お蓮 え? 築地だよ、姉さんの阿父さんは、そりや姉さんを可愛がつて可愛がつてね、どんな



事をして叱れる事なんざ無かつたんだよ。今考へると、ほんとに勿體ないやうで——妾が、世話ばつかし焼かしたから——あゝあ、もうそんな談は止さうよ、姉さん昔の事を思ふと、何だか泣き度くなるんだから（蓄音器を引寄せて）歌でも聞かう（蓄音器の譜を調べながら）けど、人間昔を忘れる位、薄情な事は無いんだよ——何だ！ 大勢の男に掛り合つて、諸方を流れて來やがつた女の癖にと思ふかも知れないけどねー、姉さんの心は、皆のやうに、卑しい根性も持たなければ、嘘吐きでもないんだからねツ、悦ちやん、お前丈は、たとへ此末どんなになつても、姉さんは、正直な、やさしい心の女だつたと思ひ出してお呉れよ！ よくつて？ 妾のほんとの心つてものは、誰も分つちや呉れないんだから——。

蓄音器が、——一夜流れの仇夢も、別れば惜しき人心、まして馴染めもう五ツ年、子迄成したる半七さん、炎の中には暮らさふが、貴郎を退いて片時も、浮世の日影が見られやうか——と歌ふ。二人は顔を見合はせて泣いて居る。その二つの顔が、單筒の側の妾見に映る——。

お蓮 悦ちやん——お前も泣いてるのかい。

悦ちやん 姉さんも泣いてるぢや無いか——己姉さんの顔が涙で見えなくなつちやつた——。

二人は、此臺詞を鏡に向つて云ふ。そして、淋しく笑ふ。

『御免下さい——』と、門口で云ふ。

お蓮 どなた？

外の聲 お蓮さんは此方こちらなんでしよふか。

お蓮 えい左様よ。誰方？（門口へ出て）アラツ！ お喜多さんなの？ まあ、お上んなさい。

二十六七の、眉毛の所に、斜に切傷のある女が遣入つて來る。

おきた お客様——？

お蓮 いゝえ、構はないんですよ。けど、よく知れてねえ。

おきた えい、始め中洲なかつの方へ何したんですけど、一昨日とか此所へ何なすつたつて云ふもんだ

から——探し々々來たんですよ——いゝ家ねー鳥渡。

お蓮 何だか——安普請だから——。

おきた でも——矢張あの——三島さん？

お蓮 えゝ。

おきた 仕合だわねー、恁して可愛がつて呉れるんだから。

お蓮 どなた？

外の聲 お蓮さんは此方こちらなんでしよふか。

お蓮 えい左様よ。誰方？（門口へ出て）アラツ！ お喜多さんなの？ まあ、お上んなさい。

二十六七の、眉毛の所に、斜に切傷のある女が遣入つて來る。

おきた お客様——？

お蓮 いゝえ、構はないんですよ。けど、よく知れてねえ。

おきた えい、始め中洲なかつの方へ何したんですけど、一昨日とか此所へ何なすつたつて云ふもんだ

から——探し々々來たんですよ——いゝ家ねー鳥渡。

お蓮 何だか——安普請だから——。

おきた でも——矢張あの——三島さん？

お蓮 えゝ。

おきた 仕合だわねー、恁して可愛がつて呉れるんだから。



お蓮 冗談云いッこ無しにしませう——今ね、二人で歌を聞いて泣いてたんですよ。へいお茶  
 (悦ちやんを見て)『骨の水ホ、』

おきた 何ですつて?

お蓮 いゝえ、何でもないので——此頃は?

おきた 實はねー、妾、東京に居まいと思つて、お暇乞に來たんですよ。

お蓮 まあ! 何だつて田舎へなんぞ行くやうに成つたの? ぢやア、あの人も別れちやつたんですか、お喜多さん?

おきた えゝ、もう夙によ。貴女が愛宕下を何して中洲へ行く直なんですよ。何だ彼だつて、いろくゴタくがあつてねー。

お蓮 そをい? 些も知らなかつた! ぢや今迄お喜多さん怎してたの。

おきた 怎やう怎やら——やつぱし、あの島屋の小母さんの世話でねー、一時鶴見の方へ行つてたんですけど、其處も何だか思はしく無くつて。

お蓮 相變らず飽性なのねー。

おきた 可愛想に、妾が飽性だなんて、妾の方ぢやあ生涯縋る氣でも、男の方で飽きるんだから

——男なんて奴は、ほんとに頼にならないわねー。

お蓮 そうか知ら? もつとも、散々道樂を爲抜いたおきたさんなんか、ら見れば、世間には氣に入る男なんざア無いかも知れないわ。

おきた 那麽事あ無いけど、自分の方でも今更堅氣になれる體でも無いと思つてるし、男の方でも怎で金で雇つた女だ位に思つてるんだから、情合は無し、實意つて事もなし、云はゞ妾商賣なんて、考りや浮氣なもんですものねー。男に縋らうとするのが天で間違かも知れないし、堅氣らしい實意を見せやうとするのも馬鹿かも知れないんだわよ——怎せ元々、お金で品物を買ふ氣で居るんだから二人の仲に縁でものが有て繋がれてるんぢや無いんだから——今更思つたつて仕方の無い事だけど、妾なんざあ堅氣で居れば居られたものと昔の事を後悔する事もあるんですよ。と云つて、もう是迄持ち崩した體を元へ返さふつたつて駄目だし、縦んば自分一人は堅氣になつた氣でも、他が相手に爲て呉れないんだから、やつぱり此儘一生を送るんだわ——ちよいと、一喫頂戴な。

お蓮 あらッ、妾、煙草は喫はないの——買はせませう。

おきた はゞかり様ね。



お蓮 いゝえ——悦ちやん行つて来とくんな——

悦ちやん あゝ、何買つて来るの？

おきた バット——濟まないわねー。

お蓮 いゝえ——ちや行つて来とくれ。

悦ちやんは、煙草を買ひに出る。

お蓮 で此の先田舎へ行つて怎するの？

おきた 妾？ 藝妓しやうと思つて——。

お蓮 藝妓んなるの？

おきた えゝ。丁度世話をして呉れる人があるから、三年ばかり辛抱して、ちつと稼いでね、世

間から棄てられた時の用心をしやうと思つて——變な顔して、何か可笑いの？

お蓮 いゝえ！ 可笑い所なもんですか。妾何だか悲くなつて来たわ。

おきた 怎して——。

お蓮 妾、自分の體ぢや無しするから怎する事も出来ないけど、何だか貴女を田舎へなんぞ遣り

度く無いわ——田舎の藝妓なんて——田舎つて、そりやあ、行つて御覽なさい、淋しい所です

ものねー。

おきた お蓮さん、田舎に居た事があるの？

お蓮 えゝ、ありますとも！ 居られるもんなら東京に居らつしやいよ。暗い淋しい田舎なんぞ

へ逃げてくより、明い賑かな所に居る方が、どんなにいゝか知れやしないわ。

おきた だつて、居たいにも居られなくなつたんだもの——。

お蓮 那麼事ア無いわ、妾あんたの心一つでどんな立派な人の女房さんにも、堅氣な人にもなれ

ると思ふわ。

おきた そりや駄目！

お蓮 駄目な事があるもんですか。貴女の心の持ちやう一ツで、妾きつと成れると思ふんだから

那麼からはづみをして却つて取り返しが付かない深味へ陥るより、此所で思ひ返したら怎え？

ねーおきたさん、自分でもう駄目な體だと決めないで思ひ返した方が可ぢや無いの、妾何も貴

女のやうに自分を殺す事ア無いと思ふわ——意見ぢや無いのよ、ねー氣に爲ないで聞いて下さ

いよ。あんたなんざあ、阿母さんもあるし、身寄も兄弟もあるんだから、妾と違つて怎麼事で

も出来るぢやないの。



おきた 親や兄弟はあつても、貴女のやうに可愛がつて呉れる人が妾にや無いんだから——人間  
 てものはねー、自分の身の安心な時は、人の苦勞は見透せないもんなんだらうけど、當人の身  
 になつて見ると、よくく足搔のつかない事があるからこそ、田舎へなんぞ賣られて行くやう  
 になるのよ。

お蓮 そんな皮肉を云はれると妾何にも云へないけど——妾のほんとの心はおきたさんにも分ら  
 ないんでしようよ。

おきた 御互様にねー——けど今に分るでしようよ。誰も頼る人が無くなつた時、さあ堅氣にな  
 らうつたつて、貴女に出来る事ちや無いから——。

お蓮 出来ますとも！ 妾何時でも堅氣なんだから——。

おきた ぢや生娘の時から、今の一人一人を守つて居たと云ふの。

お蓮 いゝえ！ そんな嘘は云はないわ妾、けど昔は昔の事ですわ、妾今はもうあの一人を大  
 切にかけ、死なうと云へば、何時でも死ぬ氣で居るんだから——。

おきた どんな人にもほれつほいあんたはほんとに得な性分だわねー。

お蓮 得だか損だか知らないけど、妾何時でも眞實で居るんだから。

おきた 何でもいゝわ、妾元々流れて来た體なんだから、やつぱり此の儘一生を終るんだわ。

煙草を買ひに行つた悦ちやんが歸つて来る。

お蓮 遅かつたのねえ。

悦ちやん 今ねー、そこで泥棒が捕まつたよ。

おきた え？ 泥棒が——？

悦ちやん あゝ——背の低い青い顔の奴だつた——（とマツトの箱を出す）

一座の氣分が何となく變つて来る。おきたは美味想に巻煙草を飲む。

お蓮 ぢや怎しても田舎へ行つて藝妓になるんですね。

おきた えゝ——又その中に會ふ時もあるわよ——體さへ丈夫で居れば、又きつと會へるんだか

ら——お蓮さん御厭ひなさいよ！

お蓮 えゝ有難う！ けど何だか此儘別れちまうのは、御名殘惜いやうだわねー。ゆつくり昔の  
 談でもして氣けん克く別れやうぢやありませんか。

おきた えゝ、けど向でも一日も早くつて云つて来るし——てば少し都合して貰へなくつて？

お蓮 お金？



おきた えい！ほんとに申兼ねた事なんだけど、他に相談相手もなし、わざわざ訪ねて来たんですから。

お蓮 そうねー、お金つて妾、自分の懐にあるんなら、怎にか成ならい事も無いんだけど——何れ程なの？

おきた 大してぢや無いのよ、けど、此儘行つちまへば、阿母さんにも永の別れに成らないとも限らないし——着物の一枚も着せてやり度いと思つたり——。

お蓮 ふーん！

おきた 近所の人達にも、それ〴〵義理もして行き度いと思つてね。

お蓮 ふーん！

おきた それに、向ふへ行き早々から小使に困つて惨めな思ひも爲たくないと思ふもんだから——強い事を云つてもねーお蓮さん、向へ行つて怎云ふ風が吹くんだか、一生浮び上られないやらそんな事思ふと、妾もう胸が一杯に成つて、あーあ何の爲に生きてるんだかと、しみ〴〵悲しくなるんですよ！

お蓮 妾は、阿母さんや阿父さんの事は、そりや心から大切に思つてたんだけど、死ぬ迄苦勞を

掛けどうして、二人で泣くやうな事は爲なかつたけど——あんなに早く別れるんだつたら、も

つと〴〵おきたさんのやうな苦勞を爲て見ればよかつた——御金怎にかしたけませうよ。

おきた そを？

お蓮 え、思ふやうに出来るか怎だか分らないけど、何時迄に要るの？

おきた それがねー、もう迫り抜いてるんで、妾明日の夜汽車で立たうと思ふの。

お蓮 明日？ 急だわねー、ぢや今夜中に怎にか成らないぢや駄目なんですよ？

おきた え、——是非とも——家へ寝るなア今夜つきりなんだから。

お蓮 困つたわねー、これで二三日でも間があるとでも云ふんなら——いゝわ！ 是で怎にかして下さいな。(と、先刻旦那に貰つた指輪をぬいて渡す)

おきた まあ——いゝの？ 悪かない事？

お蓮 (相手の言葉をさへ切るやうに急いで) 心配しないでいゝ事よ、妾あなたに泣かされたから、それを上げますわ、思ふやうに御金になるか怎だか知らないけど、いゝやうに爲てねー、阿母さんも喜ばして、出来たら近所の人にも何なすつて——飛ぶ鳥後をにごさすよ。

おきた 有難うムんした！ これでどんなに助かるか——お蓮さん濟まなかつたわねー。



お蓮 いゝえ！ 貴女と妾とは、怎云ふ風にして御友達に成つたんだか忘れたけど、きつと二人の間にや深い縁があるんでしようから、何時迄も忘れずに居て、談相手に成らうぢやありませんか。

おきた えゝ、妾何だか勿體ないやうな氣がするけど――。

お蓮 構はない事よ！ 是から段々寒くなるんですからね、體を大切に御暮しなさいよ――行くなア寒い方ぢや無くつて。

おきた えゝ、雪の降る方なんですよ。

お蓮 ぢや妾、寒い北風が來たら、貴女を吹いて來たんだと思つてよ――そうして早く東京へ出てらつしやいよ。

おきた えゝ、お蓮さんも丈夫で、あの方とも仲よく暮して下さいよね！。

お蓮 えゝ。

おきた ぢや妾もう。

お蓮 歸るの？

おきた えゝ、種々用もありますから。

お蓮 そをゝ！ 何だか妾やり度くないけど――その中にやいゝ風が吹くわね！。

おきた えゝ、何時迄こんなでも居まいから――さよなら。

お蓮 さよなら。

二人は、お蓮の方から先に出した手を、かたく握り合ふ。そして淋しい影を残して傷のあるおきたは歸つて行く――。

お蓮 あゝ、いゝ日を送つた！

悦ちゃん 姉さん。

お蓮 え？

悦ちゃん 旦那に叱られやしないかい。

お蓮 そんな心配爲とくれでない！ 姉さんいゝ事を爲たと思つてるんだから、妾大變嬉しいんだから――。

悦ちゃん だつて――。

お蓮 だまつて居て御呉れつてば――をや？

悦ちゃん 旦那だらう？ おいら隠れやう。



お蓮 何だつて？  
悦ちやん 己怖くつて爲方が無いんだもの。

悦ちやんは、水口の方の障子の中に隠れて仕舞ふと表から旦那が遣入つて来る。

旦那 今そこで、おきたに會つた。

お蓮 あゝそ、今迄家に来てたんですよ、何か談して？

旦那 いゝや、あん畜生己の行くのも知らずに泣き乍ら歩いてやがつた。

お蓮 泣いてましたか。

旦那 うん、しくしくやつてやがつた、怎したんだい。

お蓮 寒い田舎へ行つちまうんですつて。

旦那 喰ひつめたんだな、怎であゝ云ふ女の一生はそんなものだよ——あゝ云ふ奴は流れ渡つて  
る中に死ぬんだ——家へ何しに來たんだい？ きつと金でも借りに來やがつたんだらう？ 決  
して相談なんかに乗るなよ！ あんなあばづれは何を云ふか分るもんぢや無し、人の好い御前  
を欺らかす涙は出して、そりやあ眞實なんざあ無いんだから——乗りやしまいね！

お蓮 えゝ——。

旦那 乗つたのか？ 怎したんだ？ 御前何だか變だぞ、御前一人なのか。

お蓮 いゝえ、悦ちやんが來てるんですけど——。

旦那 もう呼んだのか！ 何處に居るんだ！ 己はあの子供は嫌だと云つてるぢや無いか、早く  
歸しちまへ！

お蓮 えゝ、でも忘れ物を届けて貰つたんですから。

旦那 何だ？

お蓮 あれ——（簞笥の上の朝顔の鉢を指さす）

旦那 馬鹿！ あんな泥だらけのものを簞笥の上へ置く奴があるもんか、怎して御前は物の見境  
ひが無いんだなア、あんなもの己が棄てる！

お蓮 棄てないで下さい後生ですから——悦ちやん悦ちやん。

悦ちやんが、恐る々々出て来る。

旦那 何だつて隠れてなんぞ居たんだ！ 御前は這處所へ來る人間ぢや無いんだ！ 早く歸れ！

お蓮 そんな酷い事云はないだつて——ぢや今日は御歸り、ねッ、阿母さんに宜しく、姉さん又  
上りますからつて、よう、云ふんだよ、そいからね！、姉さんまだ御飯前なんだから、その



角で何時もの御そばを一ツ云ひ付けとくれ、御苦勞だけど——さッ電車代（と五十錢銀貨を渡し  
てやる）

悦ちやんは、黙って踵つて行く。

旦那 何程與つたんだい？

お蓮 五十錢。

旦那 氣前が好なア。

お蓮 ほい、（媚を持つて）入らつしやいまし、先刻ねえ、あの子と二人で蓄音器の『美濃屋』を  
聞いて二人で泣いちやつたんですよ、『三勝』は可愛想ねー。

旦那 へー。

お蓮 怎かなすつたの？ 何だか變ぢやありませんか、悦ちやんが來てたのが悪いんですか？

ええ？ ねえ、機嫌を直して下さいな。

旦那 己の云ふ事が凡て御前に背かれないんだから、あんまり好氣持は爲ないよ。

お蓮 えい——。

旦那 先刻何と云つて己は歸つたんだ？

お蓮 えい——。

旦那 只えいぢや分らないぢや無いか、何と云つて歸つたよ！

お蓮 申し譯がムいません。

旦那 己イヤだよ全く！ 己の世話に成らない氣なら、何處迄も反對するさ、なア。

お蓮 ですから、申譯が無いツて云つてるぢやありませんか急に那麽イヤな事仰有らないだつた  
つてい、わ、妾の心は何時も貴郎に云ふ通なんですから——。

旦那 又泣くのか！ 止して呉れ、己は泣くのが大嫌なんだから——泣くな！ 何か云ふと御前  
は直ぐ泣くんだ、泣く手間で己の云ふやうに爲たら怎だ！

お蓮 えい——。

旦那 きちんと帯を締めろ！

お蓮 帯を締めながら、さつきから人が來通しだつたもんですから——。

旦那 お蓮！

お蓮 え！

旦那 序だから云ふ丈の事を云つて、御互の腹に何にも無くしやうぢや無いか。



お蓮 え、。

旦那 中洲から此所へ移して来たのも、何も己の家に近いと云ふ許りでなく、己はなるべく御前を己の思ふ通りな女に爲やうと思つたからだつて事は、御前にも好く分つてる筈だなア、己は御前が好なんだ！ 御前が可愛いんだ、だから毎日忙しい銀行の仕事で頭を疲らして歸つて来て御前と一所に遊ぶのが何よりも己の樂みで、一日中で一番己の愉快な時なんだよ。好く分らなくつちや不可ない。己は決して色情ばかりで御前を恣して世話を爲てるんぢや無い、云はゞ、呑氣な子供のやうな御前の心で己の疲れた頭を洗つて貰ひ度いからだよ。だのに、御前はやらに人を寄せる事が好きだ、中洲に居た時も毎日きつと誰か知らん遊びに来る——一體己が御前の所へ遊びに来る時に他に人が居るのは己に取つて愉快だらうか？ あんまり好氣持はしないよ己は！ やつかみ性なのか甘いのか知らないけど、好い氣持は爲ないよ。

お蓮 え、そりや好く分つてますわ。

旦那 分つてるなら、何故此所へ来て、まだ三日目だと云ふのに己の嫌ひな子供なんぞ寄せたんだ！ 一つには世間體もあるし、餘り浮氣ななやうで己に成ると癪に障る。それからあんな子供に五十錢も與るなんて事が己はイヤだ！ 五十錢は御前には僅な金かも知ないけど、己の懐に

這入る時には己が死ぬ氣で稼いだものなんだからなア、そりや己が御前に與つた金を、御前が皆乞食に投げて與らうと怎うしやうと、其をぐずぐず云ふんぢや無い、御前の勝手に使へだが、どうぞ、己の前であんな面當見度いな事を爲て呉れるな、いいか。

お蓮 そんな氣で爲たんぢや無いんですけど、是から氣を付けますから何卒——。

旦那 己は怒つてるんぢや無いよ！ 只もう少し落付いて、頼みになる女に成つて欲しいと思ふんだ。女房らしくと云ふのもそれを云ふんだよ。前と違つて此度は皆自分一人で爲なくつちや成らないんだから、一家の主婦らしく、針を持つとか、洗濯をするとか——人を寄せてぶか／＼遊ぶ手間でだね、万望委らしくなくなつて呉れと己は頼むんだよ。

お蓮 え、——。

旦那 きらんとして、眞面目で、頼みになる女に成て己を慰さめて呉れるやうにや成ないか？

え！御前は利口な女だ、可愛らしい心の女なんだから、成れるだらう？ 此所へ来た時は、ほんとの自分の家へ歸つて、女房の世話に成るやうな氣持に己がなれるやうに、御前には爲て呉れられるだらう——己の云ふなアそれ丈だよ。分つたらう？ 分つたらい、。それでい、。もうそんな談は止めやう、で例時のやうに何か面白い談でも爲て貰はう——何を考へてるんだ？



え？ 氣に障つたのか。

お蓮 いゝえそんな事！

旦那 ぢや怎したんだい？

お蓮 怎も爲やしないんですけど、妾怎すりや恠貴郎の氣に逆らふやうな事を爲るんでしよう。云はれる時には、あゝ濟まないと思ふんですけど、何を頼りに生きてるかと思ふと、遂心細くなるもんですから、人でも來て紛れてないと、段々體が冷たくなつて行くやうな心持がするんですもの。

旦那 其が御前は何にも定まつた仕事と云ふ事を爲ないからだよ、飯を焚くぢや無し、一日暇で仕方が無いから、體を持ちあつかふやうになるんだよ。針も持たず――。

お蓮 えゝ――仕事でも爲て見やうかと思つても、誰の爲にも思ふと、張合も何にも無くなるんですもの。是が妾は此家で死ぬんだつてしつかりしたメドがあるなら、何をしても勵みも付かふし、爲る事にも緊乎した根があるやうに思へるでしようけど、明日怎なる體だか分らないと思ふと、鳥渡、そりやもう淋しくつて堪りませんわ。

旦那 そりや氣の持ちやうで怎にでもならうと己は思ふがなア。

お蓮 そうですか知ら？ 随分一生懸命になつて、貴郎の入らした時は、どうぞしてまめしく働いて見やう、旦那様が歸つてらしたと思つて見やうと爲るんですけど、何時か歸つて仕舞ふんだ、それも知らずに喜んで居るんだと思ふと、何だか自分で自分が可愛想に成るんですわ。

旦那 ぢや己の女房にして呉れゝば、思ふやうな女に成ると云ふのかい。

お蓮 別にそんな望は無いんですけど、只御世話に成つて、何時迄も變らなければいゝんですけど――貴郎は貴郎が仕事をして妾の事を思つて居て下さらない時は、妾に妾で居ろ、此所へ來た時は女房に成れつて云ふんですけど――そんな事は無いでしようけど、もしや貴郎が妾を棄てゝしまふ時は、妾と切れたと思ふでしようけど、女房と別れたと思つてなんぞ下さりつこはないんだから――それも知らずに女房のやうに盡して居て、何時かお妾で棄てられたら、妾どんなに悲慘でしよう。

旦那 そんな事を云つたつて今更怎なるもんぢや無い。散々道樂を爲抜いて來た御前なんぞは、一生人の女房になれる女ぢや無いんだ！ 縦んば自分は成れる氣でも、子供は出來ず、つまりもう御前の體が云ふ事を背かなくなつて居るんだからなア――是が生娘ならだがねえ、御前が己



に盡して呉れる實意や親切や、うまい言葉は、皆己以外の男に習つて來たんだからなア——御前の優しい心を思ふと、己は女房に爲度いと思ふ事もある。けれども、その優しい心も皆他の男に盡した復習おぼろひだと思ふと己は何だか悲しくなつて來るんだ——獨で居る時なんぞ、しみじみと御前の事を思ふと、御前から聞いた昔の男の顔が幾個も幾個も見えて來て拂つても拂つても退かないんだ！ そんな時は、何故御前は娘の時に己の所へ來なかつた、何故可愛いお蓮は道樂をして來た、無垢の體で無いと、己は自分の事のやうに、汗が出る迄口惜く思ふんだよ。

お蓮 貴郎は又、何時ものやうに、妾が貴郎と恚なる迄、何にも知らなかつた娘だつたと云へと仰有るんですか、昔の事も何も忘れろつて仰有るんですか。

旦那 何しろ己は、もうそんな事を考へる丈不快だ！ ねえお蓮！ 御五に昔の無い——たつた今生れて來た二人だと思はうぢや無いか。え？ 二人には昔は無い、己に女は無かつた、御前にも男は無かつたと思つて、新しい交際をして生涯仲好く暮さうぢや無いか。

お蓮 え、——けど、昔の事を忘れないだつて、妾貴郎を心から思つてるんですから、些ちとも耻しい事なんぞ無いんですわ。

旦那 ぢやあ、昔の男の事は、怎しても忘れられないと云ふのか。

お蓮 男の事は怎でも、妾昔の自分の事が忘れられないんですわ、子供の時の事や——阿母さんや御父さんの事——死なうと迄に苦勞した時の事やなんぞ思ひ出すと、自分で自分が可愛想になつて、今でも泣いてやれるんですわ、だからもう、妾はあの朝顔も棄てられないで、あれが本當に枯れる時は妾も死ぬんだ、あの櫻の花が妾の肌から離れる時は、妾の體の冷たくなる時だと、何時でもさう思つてるんです。

旦那 櫻の花とは何の事だい？ 御前そんなもの有つてるのか。

お蓮 えい。

旦那 見せて御覽。

お蓮 えい。

お蓮は、赤い帶上を解いて、その中から古い手紙に巻いた花びらを大切相に出して見せる。

旦那 此花が怎したんだい。

お蓮 聞いて下さる？ ——云ひませうねえ。あの、妾が伯母さん所を逃けて田舎へ行つた春なんですよ。その人と怎しても別れなければ成らなくなつて（胸が一杯になつて、鳥渡言葉が途切る）その時その人が手紙を呉れてもう一度會はうと云つて呉れたんですよ。いろくいろくの邪魔が



這入つてたもんだから、もうそのまゝに別れつきりになるのかと思つて居る時でしたから、もう嬉しくつて嬉しくつて、早くから約束の場所へ行つて待つて居ると、日が暮れて、段々淋しくなつて来るもんですから、妾泣きながら立つてると、御寺の鐘が鳴り初めたんでしよう。その音が、妙に引きつけられるやうに、胸の底迄響いて来て、縋り付くやうにその方へ行つて見ると、櫻が一杯咲いて居て、夢のやうな所なんでしょう。怎して這裏所へ来たんだらうと思つた時は、もう鐘の音もせず、四方が暗黒くろくろになつてるので、大急ぎで引返して約束の所へ来ると、その人はもう居ないで、死ぬやうな思ひで會ひに来たのに居ないから歸る——一生薄情を恨むつて——その手紙が置いてあつたんです——それを見た時は、妾もう氣狂のやうになつて、泣きながら家へ歸つて、着物を脱ぐと、懐だの袂だのに、櫻の花かどつきり散り込んで居たんですよ——さうした縁だと諦めやうとしても、妾何だか悲しくつて物足なくつて、永い一生の中には、一度はその人に會へるだらう、會つたらその晩の事を話して妾の心を云はうとして、それを取つてあるんですよ。

旦那 ぢや今だにその男の事が忘れられないと云ふんだね？

お蓮 その人は怎でも、妾その時の事が、怎しても忘れられないんです。だから獨りで居る時な

んぞ、ちよつとした行き違ひから、こんなに永く悲い思ひをした事を思ひ出しちやあその花を見てるんですけど——段々花の色が褪めて、今ぢやもう眞白になつて居るでしようよ。

旦那 (花と手紙とを返して) をい、その花を棄てないか。

お蓮 えい？

旦那 その手紙も焼いて呉れないか。

お蓮 是もですか？

旦那 あゝ、人間は、過ぎ去つた昔の事をいくら思つたつて駄目な事だ！ 大切なのはたつた今の事なんだから、御前も心の底から己を思つて呉れるなら、己も御前を一生懸命に思はふ、でなれ、ば夫婦にならうぢや無いか——なア、己の心が分つたら、どうぞその手紙も破つて呉れ！で破ると一所に御願だから昔の事を全然忘れて仕舞つて呉れないか。

お蓮 忘れませうか——。

旦那 あゝ、忘れて御呉れ！ 昔の事なんぞ全然忘れて、己を大切に思つて呉れ、ば、己も誓つて御前より他の事は思はないから。

お蓮 えい！ 分りました！ 生れ變つた女になつて——何も彼も全然忘れちまいましたよえ



(手紙を両手で引裂うとして) 男の心が巻き込めてあるんでしよう——不實な妾にや破けないから——貴郎破いて下さいな——。

旦那が、執着もなく、その手紙を破るのを、お蓮は黙って見て居る。伯母さんが静かに水口の方から遣入つて来る。

旦那 あゝ、伯母さんが来た！ 丁度いい。二人の證人に成つて貰つて、御互に昔の事を思はないと、心から誓はふぢやないか。

お蓮 えゝ——もう何にも思ひません。

旦那 よし——さあ、手を御出し、握手しやう——をや？ 御前先刻の指輪を怎かしたか。

お蓮 えゝ——おきたさんが、餘り可愛想だもんでしたから。

旦那 遣つたのか。

お蓮 えゝ。(と旦那の顔を見る)

旦那 あゝ駄目だ！

お蓮 えゝ？

旦那 御前にや己の心は、全然分らないんだなア——迎も駄目だ！ 己が右へ行かうとすれば御前は左へ行く女なんだから。

お蓮 ですが、妾あんまり可愛想になつたもんですから——後でよく何したら——別に悪い事を爲たとは思つちや居ないんですけど——。

旦那 悪い事ぢや無い？ そうだらう、御前から見れば左様だ！ 然し己は氣持が悪い——お蓮御前は何故そうだ！ あゝあ、もう駄目だ、己は御前の世話は斷はる！ 己のやうなイヤな男の世話にならずに、御前と同じ氣持の男の世話になれ——然し己は残念だ！ お蓮、己は御前の心が決して憎いんではないんだぞ！

伯母 旦那様、何かお蓮が悪い事を致しましたんなら、妾からよく云つて聞かせますし、どうぞ年寄が御詫を申しますから——。

旦那 何有！ 元々兩方の氣持が違ふんだから永く交際する筈はないんだ！ (と立ち上る)

お蓮 あなた！ 妾の心は、貴殿に分つて下さるんでしようね。

旦那 己には分らん！

お蓮 女の本當の心は、男には分らないんでしようか？



旦那 己の心が御前に分らないと同じ事だ！  
伯母 旦那様——。

旦那は黙つて歸つて行く。  
しばらく間。

伯母 蓮ちゃん。

お蓮 え、？

伯母 御前怎するつもりなんだえ？ 怎云ふ行さつか知らないけど、御前はやつぱり昔の氣性が抜けないんだねえ。

お蓮 だつて——妾別に悪い事とは思はないわ、指輪を買へる妾から見りやあ、あの人はそりやあ可愛想な身の上なんだから。

伯母 ちや御前は、今日戴いたものを遣つちやつたんだね？ まあ、何て人だらう、お前にや人の親切も何も全然分らないんだねえ、ちやあ怒る方が無理はない——何時迄そんな了見で居るんだか、伯母さんを何時迄泣かすんだらう——蓮ちゃん。

お蓮 え、？

伯母 お前、そんな氣で、明日から怎するつもりだか——あゝあ、考へても何だけどね、お前の家は人様の妾風情になるやうな家ぢや無かつたんだよ！ お前だつて心がらでこんな事を爲てるんぢや無いか——苦勞知らずのお妾ですと云はれるよりやあ、伯母さんは、お前が世帯の苦勞で瘠せた方がどんなに嬉しいか分りやしない。妾は子供はなしお前が可愛い身内の一人なんだから、怎ぞして一生眞面目な女で暮せるやうとばつかし思つてるんぢや無いか——家に居る時だつて、お前さん知るまいけど、神信心を爲たり——そんな浮た氣で居て怎なるんだらう、え？ 何時迄若くつて居るもんぢや無し、どこにお前の了見があるんだか、考へると可愛想で——愚痴を云ふやうだけどねえ、蓮ちゃんお聞きよ。家に居る時分、あの酒屋の勝さんと夫婦にしたいと伯母さんどんなに氣をもんだか知れやしない。そうなつてりや今は樂な體だつたかも知れないしするの——田舎へなんぞ逃けて行つて——それも是も皆お前さんの心一つで、自分で自分の身を滅ぼして行くやうなもんなんだよ。

お蓮 伯母さん、勝つさん今怎してます？

伯母 やつぱり酒屋をしてゐるさ——けどあの人も可愛想さ、今ぢや二人のお父つさんだけど、女房さんが思ふやうでないし。



お蓮 馬鹿なんですか。

伯母 馬鹿ぢや無いけど、しきつりの方でねえ、それにお前二度も火事に會つてさ、ある物は大抵なくなすし、今ぢやあの人も骨だらうよ。

お蓮 ふーん。

伯母 あゝ云ふ氣のさくい人だから、愚痴らしい事一つ云はないで笑つてるけど、心の中を考へてやると、伯母さんほんと可愛想だよ、——あの時分は、阿父つあんは居たし全盛だつたからお前と夫婦になつてれば、却つて運が開けて、今ぢや二人とも仕合だつたか分りやしない、人間てものは何事も運だからねえ。妾やそれを思ふと勝つさんが氣の毒で——けど、今のお前ぢや、却つてお前を貰つたら猶大變だつたか知れやしない。

お蓮 で勝つあん今何所に居るの？

伯母 直ぐそこの角の酒屋さんさ。

お蓮 あゝ、あの、平屋の小さい酒屋がそれなんですか——あんなに落ぶれちやつたんですか。

伯母 あゝ——昔を思へば夢のやうさ。

お蓮 そうねえ——伯母さん、勝つさんまだ妾の事を思つて呉れるでしょうか。

伯母 何だつて？

お蓮 いえねえ——あゝ、妾何だか會ひ度くなつたわ、伯母さん呼んで来て下さいな——。

伯母 蓮ちゃん。お前そんな事を、浮氣で云ふんぢやあるまいねえ。

お蓮 えゝえ！ 只ね、昔の話を爲たりなんかして、慰めても遣り度いし——ねえ、直ぐに行つて呼んで来て下さい、ねつ、後生ですから伯母さん、妾急に會つて見度くなつたんですから——後生。

伯母 勝つあん來られりやいゝけれど！

伯母さんは、しぶく出かけて行く。

表口で、『御免下さい』と云ふ。お蓮が立つて行くと車夫が手紙を持って居る。

車夫 頼まれて上つたもんですけど——是を（と手紙を渡す）

お蓮 御苦勞様——。

車夫 外套を召した旦那からですが、別に御返事は入らないんでしうか。

お蓮 鳥渡拜見しますから！（と手紙を見て）そのお方はまだ待つてらつしやるの。

車夫 えゝ、御酒を上つて。



お蓮 何處で？

車夫 大通の鰻屋ですがね。

お蓮 そを——ぢや別に御返事は上げませんからねえ、歸つたら、妾が泣いてたつて去つて下さい。

車夫 へい？

お蓮 あゝ、鳥渡書いたけやうか知ら——いゝわ、ぢやそう云つて下さい。

車夫 へい。

車夫が歸つて行くと、お蓮は、そわ／＼して、やがて座に戻ると、急に悲しくなつて来る。伯母さんが這入つて来る。

伯母 蓮ちゃん怎かお爲かい？

お蓮 あゝ——勝つあん來て呉れますか。

伯母 あゝ、直ぐ來るつて云つたけど、何だか病人があるとかで——。

門口で、そばやが『御待遠さま』と云ふ。

お蓮 もう忘れた時分だわ——其處へ入れといして下さい。

そばや へい。(とそばを押し出す)

お蓮 あら、御薬味は？

そばや (小聲で) チョツ、しまつた！——持つて來ません。

お蓮 忘れたの？

そばや いゝえ。

お蓮 ぢや怎したの？

そばや 大體一つの時は持つて來ないんです。

お蓮 お前さん所の家風なのかい。

そばや えゝ、そう云ふ譯ぢや無いんですけど、まあ左様なんです。

お蓮 そうかい！ ぢや持つて歸つて下さい。

そばや え？

お蓮 妾やそんな變挺なゝイヤだから、忘れたら忘れたと云やあ好ぢや無いか、馬鹿にしやがつて。

そばや 持つて歸りや文句は無いんでしょ。



お蓮 そうさ。

そばや 何だ一つばかり。

お蓮 一つでもお客様だよ。

伯母 蓮ちゃん——。

そばや お客様だ？ 妾の癖に。

お蓮 何だつて——此所へお這入り——。

そばや 持つて歸りや此方のもんでい。大きな事を云ふない。

外の男の聲 何云つてやがるんだ野郎。生意氣な事を云ふと只ア置かねえぞ。

そばや あッ、酒屋の旦那ですか——何ね。

外の男の聲 黙つて歸れつていのに——今晚は。

お蓮 勝つあんですか。

勝さん え——(と上つて来て)やア——久調でしたねえ、御機嫌克う——何年ぶりですかねえほんとに、伯母さんに聞いてね、直ぐにも來やうとしたんだけど、何だかんだつて忙しいもんですからねえ。

お蓮 御病人があるんですつてね——

勝さん 二番目の奴がね、少し熱を出してね、お守をしたり、御用を聞いて歩いたり、ハ、下つちや怖いや。

お蓮 ほんとお忙しいのに——けど妾急に御目に掛り度くなつたもんですから——。

勝さん 私ち會ひ度かつたんですよ——けどお蓮さん昔の通りだ——何時も綺麗だなア。

お蓮 ホ、もう駄目よ。

勝さん 駄目つて奴があるもんか、お蓮さんなんざあ是からだ！——どうしましたその後は？

お蓮 いろ／＼苦勞をしましたよ！

勝さん 苦勞？ ハ、ハ、お蓮さんなんぞの苦勞は、着物の苦勞位のもんだらう——てばねえ、

何かと思つただけで碌なものも持つちや來られない身分なんだから、一層手前ものをもと思つてねえ。

お蓮 何物？

勝さん 何でも無いんですよ、引越の御祝にね、何かと思つただけど、お酒を持つて來ても駄目だし——いろ／＼是で考へたんですけどね、何も他人ぢや無し古いお馴染なんだからと思つ



て、家の切手を持つて来たんですよ、ハ、ハ、何も買つて下さいってんぢや無いんだけど、氣は心つて云ひますからねえ。(商品切手を出す)

お蓮 有難ふんした！ 妾うれしく載いてよ。

勝さん 御禮ぢや痛み入りますよ、随分困つたお土産だからハハ、。

お蓮 いゝえ、ほんとに元を思へば他人ぢや無し。お友達なんですから、こんな義理をして下さるのも、ほんとにお氣の毒ですわ、いろ／＼と物入のなかを——てば、勝つあん——女房さんが何ですつてねえ。

勝さん え、けど、是も縁あつて貰つたもんなら諦めよるより爲方が無いさ、ねえ伯母さん。

母伯 そうともねえ。

お蓮 それに、いろ／＼災難續きだつたてぢやありませんか。

勝さん 火事に二度焼け出されてねえ、弱りましたよ。けどこいつも天災でねえ、焼けたものは仕方が無い。

お蓮 けど、ほんとに不幸つゞきでお氣の毒だわ、妾ちつとも知らないで居たけど——随分何でしよう。

勝さん え、有難ふ！ けどねえお蓮さん、人間て奴は、ちつとやそつとの事に、メゲちやあ駄目

だ！ 何でもびくとも爲ないで居ないと直ぐ災難に押しつぶされちまうに定つてるんだからねえ、まあ何云つたつて稼ぐより他仕様が無い。

お蓮 そうねえ——稼ぐ張合があれば仕合だわ。

勝さん 張合なんざ何にも無いけど、稼がなきゃ死んぢまふんだから、まあ死神と駈つこを爲てるやうなもんですよ——けどねえ、先に目當があつて駈出すやつは、直ぐ疲れちまふけど、私のやうに盲滅法に駈けてる奴は、當の無い代りには途中でくたびれも爲ない。まあうんと稼いで、一ツその中にやお蓮さんに甘いもんでも上げませうよ、ねえ伯母さん。

一座が、しんみりした氣分に遣入つて行く。と秋雨が、靜に軒を打ち初める。

勝さん をや？ 歩いて來やがつたな？

お蓮 あ、雨が降つて來た——今時分の雨はイヤアねえ

勝さん どりや、お暇しやう。

お蓮 まだいゝぢやありませんか。

勝さん え、——けど病人もありますし。



お蓮 そうねえ——餘程何なんですか。

勝さん え、——難かしいかも知れねいんですよ——あ、あ、こんなやくざな親を持った子供は可愛想だ——ぢや又。

お蓮 え、——ぢや御大切にね。又来て下さいな。

勝さん え、来ますよ！ 何しろねえ、久しぶりなんだから、又ゆるりと来ますよ、で種々昔の話でもして一日ゆつくり遊ばして下さい、ねえお蓮さん。

お蓮 え、何時でも来て下さい、妾樂みにしてますから。

勝さん え、又来ますよ——それからねえ、一ツ精々勉強しますからね、自家から取つて下さいな、炭でも薪でも——。

お蓮 え、——毎日来て下さいよね。

勝さん 来ますとも！ 何しろ御川を聞きに来て油を賣るんですからね、樂みにして来ますよ——ぢやあ伯母さんさようなら。

伯母 さようなら。

お蓮 傘上げませう。

勝さん 何一とツ走りですもの。

お蓮 でも——持てらつしやいよ。

勝さん そうですか、ぢやどんなでも好いんですから一本。

お蓮 (傘を持って来て、妾の名が書いたるけど——好くつて？)

勝さん 何だつて好ムんすとも——ぢや明日御返ししますよ。

お蓮 何時でもいいわ——てばね、妾遊びに行つても好くつて？

勝さん お出なさいとも！ 来て呉れますかほんとに？ 織ねえ所ですよ、で好きや何時でもお出なさい。

お蓮 でも——お女房さんが居るし。それに妾が這麼身分ですから。

勝さん 嬬はなが居たつて何が怖いもんか！ 好ムんすとも、お蓮さんが来て呉れりや、それこそは

きだめに鶴つるが下りたやうなもんだハ、——左様なら。

お蓮 左様なら——ぢや勝つあん。

勝さん え。

お蓮 お稼かせぎなさいよ！



勝さん ありがとう——。

勝さんは静に歸つて行く。

——と切り雨が強く降り出す。

お蓮 とうく行つちやつた！ 伯母さん勝つあん年を老つたわねえ。

伯母 苦勞するからさ氣の毒に！

お蓮 けど、やつぱり昔の事を思つてるのねえ、あの時分の事が戀しいと見えてねえ、ほんとに懐しい人だわねえ。

伯母 いゝ人だよ。

お蓮 ねえ伯母さん、妾と勝つあんとは、何所か知らんで繋る縁があるやうに思はれて仕様が無いんですけど——人間てものは、恚と思へば屹度願が叶ふでしょうが。

伯母 ——。

お蓮 ねえ、妾恚しても左様思ふんですよ、あの人と妾とは、恚、遠くでつながる縁があるやうなんですけど——。

伯母 運ちやん！

お蓮 え？

伯母 お前何時迄そんな浮いた氣で居るんだい？ やつぱりお前は娘の時分から、一生そんな氣で、ふわくして通る女なのかも知れないねえ。

お蓮 恚して？ 浮氣な女だつて云ふんですか伯母さん？ そうぢや無いんですよ、ぢや妾の心は伯母さんにも分つちや呉れないんですね、女のほんとの心の中は、それぢやどんな人にも知れないんだわ。

伯母 恚してさ？

お蓮 だつて、妾の思つてる事は、皆そでない方にばかり取られて、誰も分つちや呉れないんですもの——勝さんは女房さんも子供も有る人ぢや有りませんか。その人を恚の恚のするつてんぢや無いんですよ。只今云つたやうに妾と勝つあんとは、此世で無ければ、そのつと先の世でも、何だか結び付く人のやうな氣がするんですわ——それも矢張浮氣なんですか。

伯母 今は、そんな事を思ふ體ぢやないか。

お蓮 え——ですけど——ぢやあ、自分の心の中を、誰にも云はずに濟して居るのが堅いんですか？ 嘘を云つてるのが堅いんですか？



伯母 伯母さんは昔の人だからねえ、やつぱり女は女らしくと思ふのさ。

お蓮 ぢや、黙つて死ねと云ふんですね。

伯母 死ねなんて——そんな事を無暗と云ふもんぢや無いよ。

お蓮 でも、怎で一度は死ぬんだもの——あゝあ、けど、自分一人ぢや悪い事ぢや無いと思つて爲る事も、世間の人に悪い事だつて思はれては——怎で死んだつていゝ事は無いわ——伯母さんは死ねば極樂へ行くんだけど、妾はきつと地獄へ遣られちまうんだから、お互に死ねばもう會はれないんだわ！——伯母さん、勝さん様もう家へ歸つたでしようか、今迄、會つちや別れた人は、どんな所に何をして居るんでしよう——あゝあ妾會い度いわ。

伯母 怎したんだい。

お蓮 怎もしやしないの！ 妾死ぬ迄、自分の心を人に知られる事が出来なくて、浮氣な女で通るんだわ——自分丈は、疚しい心は持つてないでも——考へるとぢれつたくつて。(と茶碗を火鉢の角でぼんとかく)

伯母 蓮ぢやん。

お蓮 かにんして下さい。妾是で氣が晴れるんですから、いゝ心持になるんですから——伯母

さん、伯母さん後生ですから、妾と一所に泣いて下さいな——。

お蓮は、伯母さんの膝にすがりついて、泣く——。



中  
元  
の  
夜  
一  
幕



## 登場人名

志賀泰三(醫師)	四十六歳
初子(その妻)	三十九歳
四郎(泰三の弟)	二十八歳
豊子(泰三の長女)	十九歳
照子(泰三の次女)	十六歳
末子(泰三の三女)	十四歳
孝雄(泰三の長男)	八歳
松本仙吉(醫師。かつて志賀家に代診として使はれたる人)	三十二歳
齋藤順一(志賀家の薬局生)	

時 夏の事  
場所 志賀の家の茶の間

正面に小庭を見た八疊程の室。左手(口端席より)の襖の外は、表玄関に通じ、右手の襖から二階に登る事が出来る。室の中には、大きい食器棚が一つある丈で、長火鉢が無い。室の真中に、臺灣バナマの菓籠が敷いてあつて、隅の方には、柳行李が、薙なして二つ重なつて居る。その中には、洗濯物がうづ高く詰め込んである。夜の八時過であるのに、柱時計は、十二時の所で止つて居る。縁側に近い所に座を占めて、四郎と、松本とが談話をして居る。

松本 (ふと話しがとぎれたと云ふ心で) ほんとに遅いですなア先生は——

四郎 何時もはもうとうに歸るんだがね(間) 例の講習會なんだから七時には済むんだよ。

松本 何處か御廻りになつたのではないですか。

四郎 そんな事は有るまい。別に何とも云つて行かなかつたし、それに、今日は、家中留守なる事は知つてるんだから——まあもう少し待つて見玉へ折角来たんだから。

松本 はア、然しもう、そろく御暇しえんと、何しろ電車から降りて三十分もかゝる田舎ですからなア。

四郎 (事も無げに) 然し、夏の十時や十一時は宵の口だよ君、まあ居玉へ、同じ事なら會つて行つてやり玉へ、兄貴もどんなに喜ぶか分りやしない。



松本 はア（どちらとも決心のつかぬらしく）怎も、何時も何時も御留守の時にばかり来よつて、錢念なんですよ私も——

四郎 兄貴も君の事は、始終思ひ出すと見えてね、『他日志を得たら——』は怎したかなんて云つてるよ。

松本 ハ、ハ、（快げに笑つて）『他日志を得たら』ですか——そんなに云ひますかな私は——？

四郎 （笑つて）云ふね、何て云ふと云ふよ。けど、此度は本當に君も志を得たんだね、結構だつたよ。僕は、君が妻君を貰つたつて話を聞いて、實は醫者に成れなかないかと思つて案じたがね。

松本 （眞面目な顔をして）怎してですか？

四郎 （むづ／＼笑ひながら）可愛がられ過ぎてさ——

松本 ハ、ハ、ハ、（大聲に笑つて）そんな事は、ござせん！

四郎 （しばらく間を置いて）で、すぐ開業するの？

松本 さあ、その事についても、一度先生に御相談してと思つとります、何しろ、まだ何も分らん事ですから、今しばらく研究しようかと思ふとります私は——

四郎 （しみ／＼と）その方がいゝね。そう云つちや失敬だが、腕の出来ない中に開業なんぞした

つて駄目だよ。

松本 そうです！（と力強く頷く）

四郎 （續けて）それより、みつしり勉強して立派な醫者になつた方がいゝよ。何しろ御互にまだ若いんだからなア。

松本 イヤ、そうでもござわしえんぞ、もう子供が出来ましたからな私も——

四郎 （驚いたやうに）何時？

松本 （下をむいて、小聲に）三月に——

四郎 君は不可んなア、松本、はつとして四郎の顔を見る體裁のいゝ事丈しか報告しないんだから、（間）もう出来たのか。

松本 もうて貴郎、二年になりますもん。（成程と云ふ四郎の顔を見て、調子を低めて）イヤ、他日志を得たら、怎にかして一度外國へでも行つて大いに研究しようと思ふとる中に、もう親爺になりよるんですからな。

四郎 （無責任に）何今だつて行けるさ。

松本 （全然否定するやうに）駄目です！ もう私一人の體ちゆふ譯に行かん事になつとりますから



な。(問)人間系類が出来たら、何につけ思ふ通にならんもんですわい。

四郎 そんな事は無いと思ふな僕は——兄貴なんぞも、やれ家内があれぢやあとか、子供の爲にとか云ふがね、一家の事は何を云つても家長の性格が凡てを支配して行くんだよ。系類が怎の怎のと云ふのは、自分が弱い所があつて、事情に胃されて居るからなんだせ君。(相手の顔をぢつと見て)要するに一家の運でものはその主人一人で善くも悪くも出来るのさ——物論暴君でも困るが、ある程度迄自分の力を信じて、どしどし進まなくつちや駄目だよ。自分の一家つてものは、自分の作り上げたものだからね。それすら自分の思ふやうにならないやうぢや大きい社會に立つて、怎して自分の立場を作る事なんぞ出来るもんか。(問)駄目だよ。自分の作つた國の王様になれないやうぢやア。(問)兄貴なんぞあそれなんだからね。何しろ僕の家は、王様がヨク、で皇后がヨク、なんだからね。で、イザ戦となると王様が出て、その他の時は皇后が國を支配して、失敗すれば、御互に、罪のなすりつこだからたまらない——(自分の云つた事が、立派な議論だと信ずるやうな態度で、云ひ了ると、唇をなめ、口を尖らして松本を見る。)

松本 (議論よりは、事實に於ける、志賀の家庭の事を考へながら)やはり、依然として、すか——?

四郎 勿論さ——だから見玉へ、女中だつて今一人も居ないし藥局生は、たつた一人だもの——

何しろね、奥様が、日に三度も五度も、臺所を水で洗ふんぢや大抵の女中は居ないよ君。

松本 (可笑しくてたまらないと云ふ風に、笑ひながら、困ると云ふ風に)そうですね——奥さんは、元から恐しい潔癖でしたからな。

四郎 潔癖ぢや無いよ君、病氣なんだよ臺所を洗ふのが、それと座敷の掃除ね。そりやたまらないんだ。

松本 困るですなア——(少し膝でのり出して)實は、あんただから云ひますがなア、(問)志賀先生の所は、先生はえゝが、と云ふ評判が書生仲間にあるんでしてなア——そんな風だと、自然業務の方に關係しよりますからなア。

四郎 それさア、僕の云ふのは! 何しろ君、自分が悪くつて下女の居つかないのは忘れて、書生の居つくのに對して、反感を持つんだからね、つまり兄貴が、書生に甘い甘いと言ふんだよ。で、皆出て行つて仕ふと、うれしいんだね。

松本 そんな事もないでしょうが——

四郎 (首をふつて)イヤそうなんだよ。でね、その時はそりや見違へる程働いてね、あーあ他人は頼み甲斐がない、親身はどんなになつても離れない——と怎來るんだからたまらない。考へ



て見玉へそんな哲學が何處にある？

松本 困りますなア——イヤ私も、他日志を得たら一度はきつと云ひます！ たとへ、先生から門止めを喰つても、一度は必ず云ふ時があると信じとります！

四郎 大に云つて呉れ玉へ！ 君でも云はなければ誰も云はないんだからね。僕なんぞ云へばすぐ喧嘩だから——僕は君、下女なんざ大切にしてやるんだからね。

松本 然しあんたは、云はん方がえ、ですぞ！ なる丈あんたは、沈黙しとる方が得策ですぞそりやあ！

四郎 (少し力わけがしたやうに) 此頃は、もう云ひ飽きたよ。

松本 (うなづいて) 然し、あんたもえ、如滅に獨立なさらんと不可んですな。

四郎 (不快氣に) うん、その中にするよ。

松本 イヤ早い方がい、ですぞ、何しろ、貴郎か此所に何時迄居られると、先生も多少——

四郎 (うるさげに) 分つてるよ。

しばらく二人の間に、沈黙がつよく、松本手許の土から茶をつがふとして、無いので止める。

四郎 無いかい？ 今淹れやう。何しろ、夏になると、障子は外しちまふし、長火鉢でも、手焙

りでも、冬の道具はみんな物置へたゝき込んだちやふんだからね、——御茶だつて思ふやうに飲めやしない。待ち玉へ、今瓦斯でわかさせるから。

松本 もうえ、です。もうほんとに御暇します。——何時か知らん——(と柱時計を眺めて、)をや十二時——(と驚く)

四郎 (時計を眺めて) 君、止まつてるんだよ——

松本 そうでしよう(と自分の時計を出して見て) お、九時過ぎました！ 御暇ませう——

四郎 まあいゝさ——もう歸るよ。

松本 イヤ、今から行つて、丁度、かへりつくのが十一時頃になりますからな——では——(と腰を浮かす)

四郎 そう？ (名残惜し想に) ぢや又來玉へ！

松本 はア、どうぞ先生によりしく願ひます——

四郎 あゝ、又來玉へよ。

松本 はア——それから、これは(と風呂敷包を解いて) 先生が御好きでしたから。

四郎 そう、(と品物を見て) どうも御氣の毒でしたね。



松本 いゝや——實は、先生が居られたら、直ぐに一つ上つて戴かうと思ふて持つて來ましたけれど——と菓子折を押し出して眺める。

四郎 そう、よく云ひます！ けど、又近い中に來玉へよ。兄貴をなぐさめてやつて呉れ玉へ——御願だ。

松本 はア——(立ち上つて、庭を眺めながら) 庭も一向手が届かんですなア。

四郎 君が居た時分は庭は綺麗だったね、毎日君が手を入れて居たからなア。

松本 (しみじみと) ほんとに、なつかしい庭ですぞ此所は——國から出たばかりに此方に御厄介になつて、先生の作られた葎を、草かと思つて皆抜いて仕舞つて、えらい叱られよつた事がありましたつけ——ハ、もう、十年にもなりますなア。

松本は、しばらく庭を眺めて後『時計を直して行きませう』と、長い手を延して、柱時計を巻き切つて歸つて行く。——

四郎は、松本を送つて室にかへる。

四郎 齋藤君、時計を巻くのを忘れちやいけないぜ。(と大きい聲で云ふ)

『はア——』と玄關の方で答へて、齋藤が、踏臺を持つてやつて來る。

四郎 もういゝんだよ。松本君が巻いて行つて呉れたから——片づけて呉れ玉へ。

齋藤は、室を片づける。四郎は、なつかし様に、時計のふりこの動くのを見て居る。椽先で、きりぎりすが鳴き初める。

四郎 (しばらくして) 鳴かないと思つたら、鳴くんだね。

齋藤 はア——

しばらく沈黙の續いた後、玄關の方から主人の志賀泰三が洋服でかへつて來る。

四郎 御かへりなさい——

齋藤 御かへり遊ばせ——

志賀 あ、——暑いな四郎。(と上着を取る)

四郎 え、家の二階でさへ九十二度ですからね。——大變遅かつたんですね。

志賀 あ、——皆まだかへらないのかい？

四郎 まだです——女連は出ると長いもんですね。

志賀 殊に義姉さんはそれなんだ。何を談して居るんだか——(間) 女つてもものは妙なもんだよ。

女の中にやあ、一生の中に一度も本當の事をいはないで死ぬ奴がうんとあるだらうと思ふね。



四郎 さあ、そうでしょうね。男だつて自分で自分を知らない奴が多いんだから、女なんぞは、自分自身の慾望すら本當に理解して居ないのもあるでしょうよ。

志賀 無論さ——だから女に反物を撰まらせればすぐ分るさ。——けど、女には男に出来ない事をやる力もあるんだよ。

四郎 御産でしょう。

志賀 いゝや、そんな分り切つた事ぢやないよ、どんな所へでも、平氣で借金に出かけられる事だよ。迎も江戸兒に眞似られない仕事さ。

この談話の間に志賀は、洋服を和服に着かへて座る。

志賀 (やう／＼に落ついたと云ふ風に、座つて) 齋藤君、誰も患者は來なかつたかい？

齋藤 はア——どなたも。

志賀 電話も——？

齋藤 いゝや、電話がまゐりました。

志賀 何處から？

齋藤 河野さんから——それで、先生が御留守だと申しましたら、後程又掛けると云ふ事でムい

ました。

志賀 そう——

齋藤は玄關の方に去る。

四郎 それから、松本君が來ましたよ。

志賀 松本が——そりや残念だつたな。

四郎 で、先生、とう／＼他日志を得たんですつてね此度——

志賀 (愉快氣に) ほう——？

四郎 醫者になれたんですつてね。

志賀 そうか！ (心から云ふやうに) そりや目出度かつたなア、うん！ (とうなづいて) そりや本當によかつたなア。

四郎 それから、赤ん坊が生れたんだ想ですよ。

志賀 そうか！ (別に氣にも止めないやうに) で奴さん相變らずとほけてるか？

四郎 いゝえ眞面目になりましたよ。何でも此の先研究した方がいゝか、それとも直ぐ開業した方がいゝか迷つてゐるらしいんですがね。僕は研究した方がよからうつて云つとききました。け



ど、いづれ兄様に相談に来るとは云つてましたが、あの男も兄様が唯一の頼りらしいんですね。志賀 うん。随分多く書生も世話をした見たが、あんな男は稀だよ。あの男が私の事を考へてるのは、單純な義理や何かぢやないんだからね——あの男だけは丹精甲斐があつたよ。

四郎 (急に思出したやうに) あゝ、それから、此の菓子をは非喰べて貰ひ度いんだつて置いてきました。(と松本の置いて行つた菓子折を見せる。)

志賀 何だ? 開けて御覽(と頷で云ふ)

四郎 (菓子折を開けて見て、) やあ、水羊羹だ!

志賀 ぢや長く置いとけないな——折角持つて来て呉れたんだ、皆歸つたら御茶でも淹れやう——然し氣の毒だつたなア。

四郎 藤村ですよ——先生大分江戸前になつたなア、藤村へ廻つて買つて来るなア、兄さん嬉し  
いぢやありませんか。(兄貴の顔を見る)

志賀 うん! けど、誰れでも貰ひ手の趣味を本當に理解して居れば、きつと送り物は江戸前に出来るんだよ。

四郎 つまり貰ひ手を喜ばさうと云ふ好意が充分にあればつて事になるんでしよう。

志賀 そうさ。お中元の砂糖は、ありきたりだけれど調法で貰つた方は單に便利だと云ふ丈の事にはなるが、好意がこもつて居ないから、有難いとかうれいとか云ふ事はないだらう。砂糖は買へばあるんだからね——。

四郎 左様ですね。そう云ふ點から見れば、そうめんなんざあ、悪意がある送物ですね。

志賀 己の家なんぞから見りやあ、まあ左様だな——(ふと思ひついたやうに) 御前は一體人に貰ふもんで何が一番うれしい?

四郎 勿論、金ですね。

志賀 金以外にさ。

四郎 さあ——何だかなア。

志賀 兄さんは、敷島が一番うれしいね。けれど、松本のこれには敵はない——立派な折だな、どうしても圓助以上だらうね。

四郎 そうですね(と折を見る)

志賀 可愛想に——子供に何か布ぬいでも祝つてやらうよ此度——(獨言のやうに) あいつも親爺になつたか——自分の次の時代の人間は、己達が永年かゝつて得た經驗を一度にやつちまふやうな